

ダンス・マカブル

〈登場人物〉

すゑ芽（すずめ）	十五歳	女学生	女
織乃（おりの）	十六歳	女学生	女
歌子（うたこ）	二十七歳	喫茶店主	女
紡（つむぐ）	二十二歳	芸大生	男
響一郎（きょういちろう）	二十二歳	芸大生	男
弦作（げんさく）	三十七歳	芸大教授	男
帽子の男・古井戸（ぼうしのおとこ・ふるいど）			男

※ 他、アナウンサーや町の人等名前の無い役が多数。

〈世界観・設定〉

日本の明治大正や19世紀ヨーロッパをイメージしているが、史実や時代考証には則っておらず、架空の世界観である。時代・国・地域は特定できない方が良い。
ダンスが日常に根付いている国であり、祝いの場、追悼の場など、あらゆる場面で舞踏が行われる。特に女性にとって、ダンスはたしなみとされる。

喫茶店に、すゞ芽、織乃。テーブルを挟み、向かい合って椅子に座っている。
下校途中に寄り道をし、お茶しに来た所。
ウェイトレスが注文したものを運んでくる。
店には、二人の他に何人か客がおり、各々思い思いに過ごしている。
穏やかなBGMがレコードから流れてきている。レコードプレーヤーはカ
ウンターに置かれており、カウンターの内側では、歌子が食器を磨いている。

すゞ芽 …… 気に入った？

織乃 …… すゞ芽さん。

すゞ芽 気に入る……

織乃 気に入る……

すゞ芽 気に入った！

織乃 よかったあ！

すゞ芽 女性が多いし。

織乃 入りやすくて。

すゞ芽 小物は可愛いし。

織乃 可愛らしくて。

すゞ芽 紅茶はおいしいし。

織乃 ケーキもおすすめで。

すゞ芽 すゞ芽さん。

織乃 そして何より、

すゞ芽 え？

織乃 音楽が良い！

歌子、レコードを変える。BGMが、穏やかなものから賑やかで楽しいもの
へと変わる。

歌子、踊りの前の祝詞を歌いあげる。

歌子

《ルンタルンバイ おと おがみ 音男神 まい ひめがみ 舞姫神 の祝福を》

すゞ芽が椅子から立ち上がり、織乃の手を引いて舞台の前方に出てくる。

すゞ芽

織乃さん、一六歳の誕生日、おめでとう！

織乃 ええっ？！

すゞ芽、織乃に向けて祝いのダンスを踊りだす。

他の女性客や、ウエイトレスも、それに合わせて踊りだす。

男性客や、男性従業員のの中には、楽器を持ち出したり、手拍子をしたりする人達も出てくる。

一曲踊りきり、お祝いの拍手が巻き起こる。

織乃　ありがとう。でも、どうしたの？　用意してくれていたの？

すゞ芽　お店の人に頼んでおいたの、お祝いの曲をかけてくださいって。

歌子、片手を軽く挙げて、すゞ芽と織乃の視線に応じる。

織乃　本当にありがとう。こんなにお祝いしてもらって、嬉しいけど、でも、悪い気

もするわ……。

すゞ芽　何言ってるの！　十六歳なのよ。特別盛大にしなきゃ。

織乃　でも、他のお客さんもあるのに。

歌子　問題ないよ。ここは女のための店。来るのは踊りが好きな人ばかりさ。最近じゃ、どこもかしこもびびって規制しちまって、めったな所じや自由に踊れないからね。みんなここぞとばかりに便乗して、楽しませてもらったよ。ねえ？

歌子、周囲の客に同意を求める。客たちはそれぞれ大きくうなずく。

そう、でしたら、何よりです。

織乃　織乃ちゃん、つて言ったね。あたしは歌子。誕生日おめでとう。よい十六歳を。

織乃　ありがとうございます。

歌子　それから、すゞ芽ちゃん、素敵なお祝いをありがとう。あんた、すごく楽しそうに踊るね。

すゞ芽　ホントにありがとうございます、歌子さん。

歌子　お礼はいいよ、常連になってくれればさ。

すゞ芽　もちろんです。

歌子、仕事に戻る。

すゞ芽、織乃、席に戻りながら話す。

織乃　実は、少し恥ずかしかったの。わたし、すゞ芽さんほど踊りうまくないから……。

すゞ芽　やだ、そんなことないのに。それに、お祝いの踊りなんだから、上手く踊る必要ないわ。楽しければいいの。それとも織乃さん、楽しくなかった？

織乃　それは、

すゞ芽　たの……

織乃　たの……

すゞ芽

たのし……

織乃

楽しかった！

すゞ芽

見りやわかった！

織乃

（笑って、紅茶を飲んで一息）はあ、おいしい。

すゞ芽

でもやっぱり、女子たるもの踊りは上手であるべきよ。すゞ芽さんほどうまければ、きっと引く手数多だわ。

織乃

殿方の話してるの？ わたしにはまだ早いわよ。

すゞ芽

数か月もすればあなたも十六歳よ。そうだ、盛大にお祝いしますから、油断してね。

すゞ芽

用心しとくわ。

歌子、レコードを変え、曲を流し始める。この時の曲は、サン＝サーンス 交響詩「死の舞踏」、ピアノ二台による演奏を想定しているが、もしくは、その曲のアレンジ、または、全く違うオリジナル曲でもいい。しかし、悲壮感ある舞曲であり、二人の奏者による演奏であること。

すゞ芽、紅茶を飲む手を止めて、曲に集中する。

織乃

すゞ芽さん？

すゞ芽

歌子さん、この曲は？

歌子

え？ ああ、知り合いに芸大の教師がいてね。その学生二人の演奏らしいよ。なんて曲かは聞いていないけど……悪いね、暗い曲だとは知らなくて。

すゞ芽

いえ、……何て曲なんでしょうね。なんだか、曲が、

すゞ芽、音に吸い込まれるようにして立ち上がる。曲にのって踊りだしそうになった所で、すゞ芽の後ろから女性客の発狂する悲鳴が聞こえる。

女性客

あああああああ！

すゞ芽、びくっとなって振り返る。

女性客、一心不乱に踊り始める。

歌子

取り押さえない！

ウェイトレスが数人、発狂した女性客を押さえつけ、女性客を外に連れていく。女性客は尚も、踊ろうとするのをやめない。

歌子、電話で警察に通報してから振り返る。

歌子

すまないね、警官が来るまでの辛抱だよ。まったく、突然はやめてほしいね。

織乃 わたし、初めて生で見ました。本当に急になってしまうんですね。

歌子 ああ、おそろしいことだね。

織乃 慣れっこみたいでした。

歌子 時々だよ。店なんてやってると、どうしてもね。こんなの慣れなくなっただけだよ。

織乃 でも、皆さんすごい対応でしたわ。ねえ？

あら。

すゞ芽はこの時点で客席に対して後ろを向いている。

織乃 泣いているの？ すゞ芽さん。

すゞ芽 え？

すゞ芽の目から涙がこぼれる。すゞ芽は、自分が泣いていた自覚が無く、指摘されて驚く。

〇二

芸術大学音楽科、弦作の研究室。

部屋の隅に置かれたレコードから、場面「二」と同じ二人のピアノ演奏が流れっぱなしになっている。

紡、続いて響一郎が入室してくる。

響一郎 で、話したいことというのは二つあるんだ。一つは俺にとっての一大事、もう一つは俺にとってもお前にとっても一大事。

紡、研究室に入るとすぐにレコードプレーヤーに向かい、レコードを止める。

響一郎 あー。

紡 自分の演奏を聞いて喜ぶ趣味はない。

響一郎 勝手に止めていいのかよ。

紡 この程度で怒るようなら、あの人は俺たちを研究室には呼ばない。

響一郎 あ、それで、どれほど一大事かと言うとだな、

紡 聞かんと不味いか。

響一郎 ああ、不味い。特に、二つ目の大事^{だいじ}だけは聞かんととても不味い。

紡 そんなに大事^{だいじ}か。

響一郎 ああ、一大事だ。特にお前、俺が知る中ではお前が一番一大事だ。紡 何だ。

響一郎

舞曲の作曲が禁止されるらしい。暫くは、踊りに使うような曲を作ってはならないと。お国からの公式のお達しだ。最初の騒動から一年経つが、まだ治まる気配がないからな、踏み切らざるを得なかったようだ。

紡

騒動？

響一郎

ダンス・マカブルに決まっているだろう。

紡

ダンシングマニアなら知っている。

響一郎

そうとも言う。しかし、こっちの方がぴったりじゃないか。ダンス・マカブル。死の舞踏。

紡

趣味の悪い俗称だ。それより、作曲家に白羽の矢が立ったか。

響一郎

いや、というより、舞踏が始まりやすい環境、いうなれば危険分子を、できるだけ減らす作戦のようだ。例えば、新曲の発表が一つなくなれば、その際行われる曲の演奏披露も一つ減る、というように。なあ、一大事だろう？ 作曲ができなければお前は死んでしまう。

当然だ。俺にとつて作曲は排泄と同じだ。

響一郎

もうちょつと何か言い方はないかなあ。

紡

禁止されると死んでしまう感覚を、これ以上に言い表す方法が見つからない。

響一郎

その才能は羨ましいんだが、そんなことでこれからどうするんだ。死ぬのかい？

紡

発表しなければ作曲はばれない。

響一郎

どうだろう。お前は本当に生き辛そうな奴だ。

紡

それで、もう一つの大事というのは、

響一郎

聞いてくれるのかい！

紡

片方聞いてしまったからな。

響一郎

そうかありがたい。いや、どうしても誰かに聞いてほしかったんだ、これが本当にひどい話でな、

紡

早く言え。

響一郎

さっき、実家から電話がかかってきて、俺の見合い相手が決まったと言うんだ。めでたい話だ。

紡

ここまでは、まあ。問題は相手の年齢だ。なんと、十六歳の子どもだと言う。

響一郎

十六歳。

紡

十六歳！ 対する俺は、二十二歳！ 六歳差だぞ、相手にできるもんか！

響一郎

結婚は恋愛じゃないんだ。そういうこともある。

紡

他人事だと思って、お前な。

響一郎

断るのか？

紡

俺には無理だ。親が怖い。だからせめて、ひとつ付き合っしてほしいことがあるんだが……、

紡、響一郎、研究室に近づいてくる人物がいるのに気づく。

響一郎

あとは、宿舎に帰ってからな。

紡、響一郎、入室してくる人を出迎える態勢を取る。
弦作、研究室に入ってくる。

弦作 来ていましたか。響一郎君、紡君。

響一郎 授業ぶりです、先生。先生の研究室にお呼びいただけるなんて、光栄の極みです。

弦作 また君は、そのようなおべんちゃらしか言えないのかい？ だいたい、結構な頻度で遊びに来ているでしょうに。

響一郎 いやあ、嬉しいんですよ。先生が可愛がってくれるんだもの。

弦作 最良ならしていませんか？ やめてください。僕をクビにするつもりですか。

紡 先生、ご用件というのは？

弦作 そうでした。先日、君たちに聞かせてもらった曲があるでしょう。紡君が作曲して、響一郎君と二人で演奏したアレ。

響一郎 ここに来た時にもかかっていました！

弦作 ええ、いい演奏です。……を、録音したレコードを一枚、音楽好きの知り合い

にあげたんですけれどね、その方が、ご自身の経営する喫茶店であの曲を流した途端、起こりかけたと言うんですよ。あれが。

響一郎

弦作 ああ、えー、今流行ってる、急に踊りだすやつ。

響一郎 (同時) ダンス・マカブル。

紡 (同時) ダンシングマニア。

弦作 それ。

響一郎 いやまさか、待つてくださいいよ。私らのせいにする気じゃございせんよね。

弦作 まさか、僕はね！ ただ僕じゃなくて、その、新聞社が。

響一郎

弦作 一社だけね。

何か、人を狂わせる周波数とか、和音が組み込まれているのではないかと電話をかけてきましてね。

紡 そんな目的で曲を作ってはおりません。

弦作 もちろん、そうだと思います。だけれど、外からかけられた疑惑は、そう簡単に取り払えるものじゃないんです。

響一郎 じゃあもう、私らの名前って、マスコミに渡っているんですか！？

弦作 いいえ。学生の作品ですから、念のため、曲名も作曲者名も流出させていませ

ん。新聞社が知っているのは、僕の名前だけです。

とはいえ、記者が僕の教え子を探り回って、君たちにたどり着く可能性は十分にあるわけです。惜しいことですが、演奏会の曲目から、あの曲を外しましょう。

響一郎 えー……。

紡 わかりました。

響一郎 何でだよ、傑作だぞ。

紡 何かあつては困る。仕方がない。

響一郎 じゃなくて、もう少し惜しむ素振りをな、

紡 惜しむ？

弦作 そこは、紡君らしきですね。

それからもう一つ。くれぐれも、不審な行動はしないように。

響一郎 マスコミに餌をやるなつてことですね。

弦作 そういうことです。まあ、素行に関しては心配ないとは思いますが……ところ

紡 そう、舞曲作りが禁止になったのはもう知っていますね？

弦作 ええ。先ほど、響一郎から聞きました。

紡 よかった。実は、僕が一番心配しているのはそれなんです。紡君、作曲が大好きだから、隠れて作りやしないだろうか。

紡 ……いたしません。

響一郎 さつき、発表しなきゃいけないとか言っていました。

弦作 やっぱりー。

紡 すみません。

弦作 冗談じゃないんですよ。言つたでしょう？ 探られるかもしれないんです。もし、禁止令を無視したのがばれたら、あなたの将来に関わる大怪我になるかもしれない。最悪、響一郎君まで巻き込む大事故ですからね。

紡 ……いたしません。

紡 紡。

響一郎 ……わかりました。禁止が解かれるまでは。

紡 よろしい。響一郎君、見張りを頼みますよ。

弦作 はい！

響一郎 信用が無い。こいつより？

紡 いやあ……あつ。

弦作、テレビに走る。

響一郎

それだけ病的つてことだ。

紡 先生、お話は以上ですか？

弦作 ああ、すみません、もう一つあるんですけれど、ちよつと。このドラマだけは

見ないと眠れなくて。待っててもらえます？

響一郎 ええー……。

テレビをつけるとすぐにドラマが始まるが、突然ニュース速報に切り替わる。

(テレビ内アナウンサー) 《ドラマの途中ですが、ニュースをお伝えします。》

弦作 ええっ！

響一郎 あー、速報。

弦作 ちよっと！ 僕が何したって言うんですか！

響一郎 いや、先生がつていうか、誰かしらが何か。

紡 大規模ダンシングマニア……。

響一郎 なんだ。いよいよ社会問題だな。今度は何人死ぬんだか……。

ねえ、先生。あと一つ残ってるお話、聞かせてくださいよ。今のうちに。

弦作 そうですねえ……、

さっき言った喫茶店での話なんですけれど、君たちの演奏を流した際に居合わせた女学生が、曲を聞きながら涙を流していたそうなんです。

女学生が？ 感動して？

弦作 ええ。その子が言うには、曲が泣いているので、一緒に泣いてしまったと。

紡 曲が泣いて？

弦作 まあ、その子なりの感動の表現なんだと思います。言い方は少し不快かもしれませんが、

紡 いえ、正しいと思います。

響一郎 主題が主題だからなあ。

弦作 そうですか？ まあともかく、素晴らしいですね。

響一郎 それは先生、私と紡が手を取り合った二台四手の傑作ですから。

紡 内、二手は疑惑をかけられてしまったが。

響一郎 いや、これで覆ったようなものだろう。あの曲は害あるものじゃない。あるいは、感動しすぎて踊りだすのさ。

紡、テレビを見る。ダンス・マカブルの中継映像が映っている。

紡 感動して踊り狂うのか。

弦作 死ぬほど感動されてみたいものですけどねえ。

響一郎 先生、その発言、新聞にとられたらどうします？

弦作 君たちに顔向けできませんね……。

〇三

テレビ中継の映像。レポーターの後ろで、沢山の人々が踊り狂っている。

レポ 午後四時五十五分頃、駅前広場で百人近くによる大規模なダンシングマニアが勃発し、未だ人々が半狂乱で踊り続けています。警官が対応に当たっていますが、踊りに参加する人は増え続けており、収束には時間がかかるということです。皆さん危険ですので、駅前に近づかないようお願いします。

目撃者の方によりますと、大道芸人のアコーディオンの演奏を聴いていた客の中から数人の女性が突然踊りはじめ、徐々に狂乱の波が広がっていったと

のことです。
娘が急に叫んだ、友達がふといなくなっていた、前を歩いていた人が踊り狂って数秒後に倒れた。原因はわかっておりません。
半年以上前から、広場で行われる集団舞踏は禁止となっておりますが、踊っている人達に、警官の制止を聞くような理性は見受けられません。
繰り返します。皆さん、駅前には近づかないようにご注意ください。
現場からは以上です。

踊り狂う人々、ストップモーションになる。
ニュース番組のスタジオに切り替わり、女性アナウンサーと専門家が話す。

女アナ
最近社会問題となっているダンシングマニア、通称・死の舞踏、
（同時）ダンス・マカブル
女アナ
ですが、原因は
わかっていないんですね。
街中、会社、あらゆる場所で突如人が踊りだし、体力尽きるか
専門家
多くの場合は
女アナ
（同時）パニック発作
専門家
で死亡することが
女アナ
薬や
専門家
音楽
女アナ
水質汚濁
専門家
大気汚染
女アナ
土壌汚染が原因ではと噂されますが？
専門家
確証無くてですねえ。ただ、
普遍的に称するとしたら、
女アナ
ら、
専門家
集団ヒステリー
女アナ
（甲高い絶叫）

ストップモーション終わり、舞台全体が狂乱の舞で埋めつくされる。

○ 四

紡と響一郎の寄宿舎の部屋、弦作の研究室から帰ってきたところ。
紡、響一郎、発狂する女性アナウンサーに衝撃を受けており、沈んだ様子で
部屋に入ってくる。

響一郎
助かるかなあ、ニュースのお姉さん。
紡
発狂したのは一人だった。大事にはならないだろう。
響一郎
……。

紡 ……。

響 一 郎 さっきの話の続き、してもいいか？

紡 どれだ。

響 一 郎 俺の見合い。

紡 ああ。

響 一 郎 そろそろ家のことに真面目にならなきゃいけない頃らしい。結婚を考えるからには、俺も好きに遊んでいるわけにはいくまい。だろ？

紡 ああ。お前は誠実な奴だ。

紡 いや。親が怖い。

紡 訂正せずとも。

響 一 郎 とはいえ、^{まきの}牧野響一郎。齡二十余の若い男だ。ならば最後に、ぱあっと派手に遊んだとしても許されると思わないか？

紡 ……先ほど先生に、素行は問題ないだろうと言われた所だ。

響 一 郎 先生は純粹だからな。俺がどれほどのお嬢さんと愛し合ってきたか知らない。

紡 俺はこれより信用がない……。

響 一 郎 心配するな。派手にと言ってもせいぜい学生の手が届く範囲だ。お前も一緒に、どうだろう？ 明日にでも。

紡 俺は女と遊びを同列で考えられないんだが。

響 一 郎 じゃあ、遊びだけでもいいじゃないか。二人で飲んで、頃合いが来たらお前は帰ればいい。お前だって、ここにいても作曲はできないんだぞ？ いい暇つぶしになる。

紡 一人で行けばいいだろう。いつも知らぬ間に宿舎を抜け出している。

響 一 郎 派手に行きたいと言っただろう！ 一人で行っても金が足りん。

紡 似た趣味の友人が他にいたんじゃないかったか。

響 一 郎 こんなに誘っているのになぜそう頑なに拒むかな。いいか、最後だぞ。俺にとつての最後の宴だ。いいじゃないか、偶には親愛なる相棒殿と一緒に飲みたいんだ俺は。

紡 相棒か。

紡 違うか？

響 一 郎 いや。そこを持ち出すとは卑怯な奴だと思つてな。もう寝る。

紡、立ち上がる。

響 一 郎 ……気に入らなかったかい？

紡 知らん。お前は明日のために、酒の肴の用意でもしておけ。俺は聞くしか能がないから、お前が話せよ。

響 一 郎 任せておいてくれ、弁が立つとだけは言われるんだ！

紡、響一郎、はける。

○ 五

女学校、授業中。生徒達がバレレッスンに励むシルエットが見える。
女性教師の声のみが聞こえる。

女教師

未来を支える女子達よ、どんな作法より、どんな手習いより、女性を正しく輝かせるのは、ダンスです。この国でダンスとは、女性としての最低限の嗜みでありつつ、女性の魅力にとつて最大の強みなのです。あなたたちは何よりもダンスで測られますが、ダンスは何よりも磨くことができます。
女子よ、踊りなさい。
女子よ、己を磨きなさい。

女学校、放課後。織乃、大きな風呂敷包みを抱えている。

すゞ芽

織乃さん、帰りましょう。

あら、何？ その大荷物。旅にでも出るの？

そう。

織乃
すゞ芽

え？

すゞ芽さん、わたし、家を出るわ。

家を出る……？

家を出る！

というと、その、続けて言うと、

(同時に) 家出を

(同時に) 家出よ！

……するみたいに聞こえるけれど、

家出よ。

なんだって急に家出なんて。

(キョロキョロ周囲を見回してから小声で) その、

織乃

舞台袖から歌子の喫茶店のセットが出てくる。

すゞ芽、織乃、喫茶店のテーブルにつき、そのテーブルの傍には歌子。場面は喫茶店に切り替わる。

歌子

親にお見合いを強いられたと。まあ、よくある話さね。

織乃

でも嫌です。わたし、お家のためになんて結婚したくないんです。

すゞ芽

そりゃ織乃さんは。

織乃

わたし、好きになった方と結婚したいわ。

すゞ芽

わあ、恋愛結婚だあ。

織乃 最近はみんなそうよ。それにそうあるべきなのよ。好きでもない、よく知りもしない人と一緒に暮らして上手くいくわけがないわ。

すゞ芽 よく知って好きになるためにお見合いするんだと思うけど……。

歌子 織乃ちゃん、他に意中の人でもいるのかい？

織乃 それは、今は、居ませんが……。

歌子 じゃあ、一回相手さんに会ってみるのも、良いと思うけれどね。お見合いしたからって、絶対結婚するわけじゃないんだ。うまくいかないかもしれないだらう？

織乃 いいえ、違うんです。お見合いが決まった時点で、既に結婚も決まったようなものなんです。だって、父様が、お仕事のために選ばれたお相手ですもの。政略結婚ってやつかい……。

歌子 だからって、家出なんて危ないじゃない。

織乃 そんなことない。家を出たらわたしは高藤たかとうじゃなくなるもの。高藤じゃないわたしなんて、価値がないもの。危ないことなんてない。

すゞ芽 自棄になっちゃだめよ！

歌子 あかね、織乃ちゃん。あんたの事情は知らないけどさ、家出なんてするもんじやないよ。第一、行く当てはあるのかい？

織乃 歌子さん、お店で雇ってくださいらない？

歌子 馬鹿言うんじゃないよ、学生が。

織乃 でも、このまま家にいたら、いたらねえ、学生ですらなくなってしまうわ。

すゞ芽 ……あ、

織乃 わたしはね、ちゃんと学校で勉強して、大学に行って、自分で生きていけるように頑張るのよ。決めているの。

すゞ芽 それは、すごいと思うけど。

織乃、すゞ芽を一瞥してから立ち上がる。

織乃 歌子さんがだめなら、他の働き口を探します。

働いて、お金をためて、自力で大学に行きます。失礼いたします。

織乃、喫茶店を出る。

すゞ芽 待って、織乃さん！

歌子 すゞ芽ちゃん、追いかけてやりな。一人にするんじゃないよ。
すゞ芽 はい！

すゞ芽、織乃を追って喫茶店を出る。

町の往来の様子。舞台上に役者が、数グループに分かれて位置し、それぞれ違う店や路上の様子を表す。

往来を進むすゞ芽と織乃。町が夜になるにつれて、二人はどんどん怪しげな裏通りに入りこむ。

（往来で話す女性1と女性2）

女性1 あら、ひさしぶり。

女性2 やだ、本当、ひさしぶり。

女性1 お仕事？

女性2 終わった所よ。

（店から出て分かれる女学生1、女学生2）

女学1 おいしかった、じゃあね。

女学2 うん、また明日。

（往来で話す男性1と男性2）

男性1 聞いたか？

男性2 例のか？

男性1 禁止令だ。踊りの曲はもう作られない。

男性2 演奏まで禁止にならなきゃいいけどなあ。

（カフェで話す男子学生1、2、3）

男学1 一回でいいから、あの女給さんとお話したい。

男学2 個人的に？

男学3 俺も。

男学2 俺あっちがいい。

男学1 お話したい……。

男学3 注文してもおばさんの方が来る。

（カフェから出てくる織乃、すゞ芽）

織乃 （店の中に向かって）失礼しました。

すゞ芽 ねえ、織乃さん。無理よ、女学生を雇ってくれる所なんて。

織乃 回れるだけ回るわ。

すゞ芽 ちよっと、待って。

（レストラン）

店主 しばらく新しい人は雇ってないんだ、ごめんね。

織乃 そうですか……。

店主 もう暗いから、気を付けてね。

織乃 ありがとうございます。（店を出ていく）

すゞ芽 (織乃を追いかける)

(往来で、すゞ芽、織乃とすれ違う人)
通行人 あら、こんな時間に危ないわよ。

(往来で帰路につくサラリーマン1、2)

サラ1 こう不景気だと、飲みに行く気にもならないな。

サラ2 せっかく八時に終わったのに。あ、知ってます？ 鬱憤ばらしにいい場所があるって。

サラ1 何だそれ。

サラ2 地下にあるらしいんですけど……。

(呑み屋)

店主 馬鹿にしてるのか！

織乃 すみません、でも、

店主 呑み屋も客が居ないと思ってなあ！

織乃 いえ、

店主 出ていけ！

織乃 (黙って出ていく)

すゞ芽 織乃さん！

(往来)

すゞ芽 その、やっぱり考え直さない？ 恋愛しない結婚も、悪くないと思うわ。みんな沢山お祝いするし、羨ましがるわよ。

織乃 そりゃ、すゞ芽さんならそれでいいかもしれないけれどね。

すゞ芽 どういう意味？

織乃 もういいでしょう、わたしは大学に行くの。

すゞ芽 よかないわよ、それに大学なんて、そんなにこだわらなくても……。

織乃 ……。

(往来で客引きする女性)

客引き いらっしやいませー。どうですかー。

(往来で大声で話す男性Aと男性B)

男性3 なぜ作曲が禁止になる！ さっさと演奏を禁止にするべきじゃないのか！

男性4 国は踊りを手放さない気だ。

男性3 上は何が起こっているのか見えていない！

(往来を歩く若者たち)

若者1 北と西で大型地震だって。

若者2 正直飽きた。もつといい情報ないの。
若者3 飽きたは無い不謹慎。

若者1 温暖化。
若者2 知ってる。

若者1 あ、例の国の偉い人クビ飛んだって。
若者4 待ってそれはやばすぎ。
若者3 滅亡間近。

(往来で客引きする女性)
客引き いらっしゃいませー。お暇じゃないですかー。

(往来を歩く若い男性たち)
男性たち 何やってんのー、お嬢さんたち。こんなところでー。

ある一軒の居酒屋に、紡と響一郎が入っている。

(往来)
すゞ芽 ね、せめて引き返しましょうよ。悪い雰囲気だわ、ここ。裏通りに入っちゃったみたい。

織乃 むしろちようどいいんじゃないかしら。
すゞ芽 ちよつと、いい加減にしくちや！

織乃 だって！ 引き返してどうしろっていうの？ 表通りに雇ってくれるお店なんて無かったもの！

すゞ芽 だから、お家に帰りましょって言ってるじゃない！
織乃 家出したって言ったでしょ！

すゞ芽 それを止めてるの！
もう！ わかってない！ すゞ芽さんは何にもわかってない！ 帰っちゃダメなの。一人にならなきゃ、ただの織乃にならなきゃ、わたしは学校に行きたいの！

すゞ芽 どうしてそんなに！？
織乃 すゞ芽さんにわかりっこない。

すゞ芽 わかるように教えてよ！
織乃 すゞ芽さんは、今の世の中が嫌になったことなんてないでしょう！？ 上手

すゞ芽 に踊れるんだから！
え？

おしゃれな帽子を目深にかぶった怪しい男性(表記…帽子)が、織乃の背後から近づいてくる。

帽子 もし、世の中が嫌になったと？

暗転。

〇七

明転。紡、響一郎、居酒屋。

響一郎

俺は、無理言つて芸大に行かせてもらったんだ。

紡

親は、法律か哲学か、恥のない学問をさせたかったらしいんだが。

紡

芸術は恥なのか？

響一郎

あいつら根っから貴族だから、芸術は趣味だと思ってるんだよ。趣味を学問
すること、理解できないんだ。

紡

難儀だ。

響一郎

そんなものか。

紡

……。

響一郎

いや、お前はそういう話し方だった。

紡

すまない。

響一郎

違う。俺は、お前のその素直で端的な表現を気に入ったんだ。

紡

曲の話か。

響一郎

お前みたいな、曲の湧き水のような人間には出会ったことがない。けれど、お前が天才であるのは、湧き水だからじゃないんだぞ。人の感情そのもののよう
な曲を作るからだ。

紡

人の感情、そのもの。

響一郎

昨日、先生が話していたろう。女学生がお前の曲を聞いて、曲が泣いていると
評したと。あれ、全く射ていると思うんだ。お前の曲は感情なんだよ。だ
から、聞く人の感情にそっくりそのまま成り替わって、類まれなる感動を引き
起こすんだ。

紡

わからない。

響一郎

そうか？ んー……曲に心を揺さぶられるのではなく、曲に心に乗っ取られる、
つて感じた。あ、言い方は微妙だが、ちゃんと、これは気持ちがいい。

紡

そうか。

響一郎

俺は、そんなお前の曲を弾くのが楽しくて仕方ない。もともと音楽は好きだっ
たが、お前の曲はそれ以上の何か本能的な好意を抱かせる。芸大に来て正解だ
つたと、心底思った。

紡

……。

響一郎

……。

紡

俺に、お前ほどの、誰もが認めるような才能があれば、音楽を続けられただろ
うか。

紡

……。

二人とも黙り、周囲の客の声が聞こえてくる。

客 A

最近、不安になる出来事が多い。

客 C

最近、二か月置きくらいに地震が起こってるよな？

客 A

不安というか、不安定にする。

客 D

気にしすぎじゃないか？

客 B

何を？

客 A

国を。

客 B

ああ、ダンス・マカブルとかか？

客 E

不安を食い物にする商売があるらしい。

客 A

それもあるが、

客 D

それよりも地方で流行り病が。

客 F

こちらの人は気を付けるだろう。

客 D

それが、そういう類じゃないらしい。

客 A

工業廃棄物で、

客 C

ああ、汚染されて、

客 A

広がってる。

客 E

地下にあるそうなんだが、

客 B

あとは、隣国の様子も怪しいな。

客 D

色々巻き込んで止まらなくなってる。

客 A

とにかく、そういう不安でついつい、昔を思い出してしまうわけだ。

客 E

今は違法だけどな、

客 B

思えばほんの数年前か。

客 E

ダンスホールがあるんだってよ。

紡、響一郎、ダンスホールの話題に耳を傾ける。

客 E

世の中を不安がってるやつらみんな巻き込んでな、どんどんでつかくなってるんだ。

客 A

惚れた腫れただ、なんかあるたび、町角、広場で、女が踊って。

客 B

男も女に手を引かれて、踊って不安を吹っ飛ばすんだ。

客 E

男も女も一心不乱に踊ってな、不安を吹っ飛ばすための場所だ。作法も何もねえって噂よ。どんなに下手でも、ぐるぐる回るときやあ、誰だって歓迎されるって話だぜ。今の世の中不安だなんだと憂い事してるやつにとっちゃ、踊りの見栄えなんざ気にしてる場合じゃねえもんな。

客 F

摘発されないのか？

客 E

だから地下にあるんだろ、つっても……、実は面白い話があつてな。

客 F

客 E

そのダンスホール、運営してるのはお国なんだと。

客 F

なわけ。

客 E

その通りなわけだが。役人染みだしやれた帽子の男が、ホールに誘ってくると

か。

客F いやいや、広場での集団舞踏を禁止したのは国だぞ。それが率先して決まりを破るとも言うのか？

客E でも、ダンスが大好きなお国柄よ。舞曲の演奏は禁止せず、作曲を禁止するよな国だぜ。

紡 作曲を禁止しても無駄なのか。

響一郎

そりゃあ、誰かも言っていたが、およそ発表しなきゃばれないからな。個人の良心に委ねられるし、そもそも既存の舞曲も豊富だから、踊る機会がなくなるわけじゃない。

紡

なら、今すぐ禁止令を解いて欲しい。迷惑だ。

響一郎

まあ、解かれはしない。

紡

なぜ？

響一郎

ダンス・マカブルを防止するのに、最も有効な手段は何だ？

紡

舞曲の演奏の禁止？ 違うなら、わからない。

響一郎

舞踏の一切の禁止だ。

紡

……

響一郎

だけど、国はそれをしない。なぜかわかるか？

紡

踊れなくなるとみんな困る。日々の娯楽も、祝いの宴も、死者への追悼も、この国では全て踊りが担う。

響一郎

そう。とりわけ重要なのは、その踊りが担う範囲というのが、教会の年中行事や国王の国事行為にまで及んでいることだ。舞踏の一切を禁止すると、それら

紡

国の重要行事まで禁止することになる。

響一郎

それはだめだ。この国は昔から、音楽の神と踊りの女神によって守られてきた。国の行事がなくなれば、神の加護も消えることになる。

紡

加えて、今の情勢だ。宗教的な話を抜きにしても、普段の行事が無いというだけで国民の不安を煽る。そうなれば、何やら色々関連付けた悪い思考が流行して、行き着く先は国を脅かす混乱だ。だから、国は舞踏を禁止することはできない。同時に、舞踏に必要な曲の演奏も、禁止するわけにはいかない。しかし、

紡

ダンス・マカブルなんていう世にも恐ろしい社会問題に、何も対策を示さないわけにはいかないから、せめて作曲を禁止するっていう手段に出たんだよ。

紡

……難しいな。一つの決め事に大袈裟なほど多くの事が関わって、人はそれぞれ別の事を思う。

紡

ああ。

響一郎

お前は凄い。俺は、同じだけ情報を与えられても、そんな風に見通すことはできない。

紡

ああ。

響一郎

大したことはない。むしろ、議員志望にしては見落としが多そうだ。

紡

例えば、ほら、ダンスホールの噂は初耳だ。本当に国が関わっているのかしらん。

紡

お父上からは何も聞いていないのか。

響一郎　　ないな。あつたら大問題だ。
紡　　　　確かに。

響一郎　　まあ、国がダンス・マカブルを誘発するような真似するなど、まるでわからんが。

紡　　　　役人のような帽子だけでは証拠に欠けると、俺は思ったんだが。

響一郎　　いやあ、それはどうだろう。役人染みた服装を好む一般人がいるとは思えん。

紡　　　　（窓の外を見ながら）……そうだろうか。

紡　　　　どうした？

響一郎　　あれは役人か？

響一郎　　え？

紡、響一郎、窓の外を見ながら話す。窓の外には、役人のような帽子の男と、すぐ芽、織乃が話している様子が見える。

紡　　　　向かいの路地の暗がり、女学生と話している帽子の男だ。

響一郎　　見つけた。いつからいたんだ？

紡　　　　少し前だ。女学生が先に来て、後から帽子の男が来た。

響一郎　　じゃあ、役人じゃないか……？　こんな時間だ。彼女らを保護しに来たんだろう。逆に役人じゃなかったら危ない。

紡　　　　しかし、あの少女の顔がどうにも不安げだ。友人を引き留めているようにも見える。

響一郎　　うーん……ん？

紡　　　　響一郎、役人が、あんな暗い道を選んで入るだろうか。

響一郎　　あれ、見間違いないな……。

紡　　　　俺は、怪しいと思うんだが。

響一郎　　おい、直感なら俺よりお前だ。お前、あれが怪しいと言うんだな？

紡　　　　ああ。

響一郎　　わかった。すまない、行ってくる。

響一郎、居酒屋を出て、帽子に連れられた織乃、すぐ芽を追いかける。

紡　　　　店主、お代はここに置いておく。

紡、居酒屋を出て響一郎を追いかける。

暗転。

〇八

明転。少し時間が戻り、帽子が、すぐ芽、織乃に声をかけてきたところ。

帽子　　もし、お嬢さん。世の中が、嫌になったと？

織乃 ……どなたでしょう。

帽子 世を憂うなら、都合の良い場所がある。貴女のような人が大勢集まり楽しんでいる場所だ。

織乃 あいにく、わたし、もう家に帰る所ですので。

すゞ芽 本当！？

帽子 嘘はいけない。お仕事を探しておいでだろう？
ねえ？

帽子、すゞ芽に目配せ。

すゞ芽

帽子 あ、私と一緒に来なさい。仕事だって斡旋しよう。

すゞ芽 あ、あなた、お役人さんじゃないの？ だめじゃないの？ お役人さんが女学生に仕事を紹介するなんて。

帽子 もし、私が役人なら、かような時刻に出歩いている女学生をどこに引き渡そうか。

すゞ芽 え？ ……あつ、えつと……、じゃあ、何してらっしゃる方？

帽子 心配せずとも、拙いことにはならない。

すゞ芽

（織乃に近づき、小声で）ねえ、織乃さん、どうしよう。

織乃、帽子に近づく。

すゞ芽 ……え？

織乃 仕事、

すゞ芽 ちよつとやめてよ！

織乃 くださるんですか。

帽子 この路地の先に、地下へと続く階段がある。まずは、来てもらなさい。きつと気に入る。

織乃 仕事は？

帽子 例えば、私のようなことをしたり。

織乃 行けばわかるの？

帽子 来ればわかる。

織乃、帽子について路地に入ろうとする。

すゞ芽

帽子 織乃さん、待って。織乃さん、疲れて判断できなくなってるのよ。絶対ダメよ、行っちゃだめ。ねえ、一回帰ろう、帰りましょうよ、ほら、貴女は、帰ってよらしい。彼女一人でも、私は構わないので。

すゞ芽 何よそれ。ずるい手を使うのね！
帽子 では。
すゞ芽 あ！

帽子、織乃、路地に消えかける。すゞ芽、それを見て追いかける。

すゞ芽 待って！

響一郎 待って！

すゞ芽 え、

響一郎 よかった、見つかつて。全く、こんな時間まで。

織乃 ……あ、あなた。

響一郎 あ、彼女らを、保護してください。さったんですよね。ありがとうございます。でも、

もう大丈夫です。あ、私、二人の迎えに遣わされた者^{わたくし}です。

帽子

……牧野議員の御息です。貴方様のお知り合いですか。いやはや、差し出がましい真似をいたしました。どうか議員に、よろしくお伝えください。

響一郎

……あんた、役人なんですね。
それでは、私はこれで。

帽子

帽子、はける。

響一郎、織乃に向きなおる。

紡、響一郎に追いついてくる。

響一郎

高遠財閥の御令嬢ですね。初めまして、牧野響一郎です。

織乃

高遠織乃です、初めまして。

すゞ芽

お写真拝見いたしました。まさか、こんな所でお会いするなんて。

すゞ芽

どなた？

織乃

……お見合い相手の方。

すゞ芽

え！ あつ。（口を手で塞ぐ。）

響一郎

（すゞ芽へ）初めまして。

織乃

して、ご友人とお二人だけですか？

響一郎

……ええ、まあ。

織乃

しかし、なぜ。ここは何があるとも知れないような場所ですよ。まさか何かご

響一郎

事情が？

織乃

いえ、少し迷ってしまつて。

響一郎

迷つた……それにしては大通りから離れてすぎています。御令嬢が迷い込む

織乃

とはとても思えません。もしや何か危ない目に合われていたり……。

響一郎

いえ……、

織乃

いえ？

織乃

いえ、

響一郎　（織乃が持つ荷物を見て）家出……？

織乃　いえ！

響一郎　やはり何かご事情が！？

織乃　いえ、本当になんでもございませんで！

響一郎　しかし、家出などによっぽどのが！

織乃　家出じゃありませんから！

響一郎　ではその荷物は！？

尚も押し問答が続きそうなのを遮って、紡が口を出す。

紡　響一郎、彼女が、お前の言っていた見合い相手か？

響一郎　あ、ああ。あ、（彼は、私の友人です。）

紡　（遮って）十六歳の。

響一郎　ん、

織乃　え、

紡　そう案ぜずとも、賢そうな子だ。将来は立派な女性になる。

響一郎　おおおい！

織乃　……えっと、

響一郎　あ、いや、えっと、こいつちよつと天然で、いえ、決して、あなたとお見合
いが不満というわけではなくてですね！

織乃　は、

響一郎　え、

織乃　あ、の、わたしの話を、ご友人に、していらしたのですか？　その、不満、で
……？

響一郎　……、……いえ、不満というわけでは、お見合いは、謹んでお請けしたく、存
じております。（だんだん小声）

間。

織乃　ふふ、（笑う）

響一郎　え、

織乃　ふふふ、ああ、おかしい。わたし実は、お見合い話が不満で、家出したんで
す。

響一郎　え、

織乃　いえ、あなたのことが不満というわけではないのですけれどね、

すゞ芽　そんなこと言ってもいいの？　織乃さん。

織乃　もういいわ、だつてすゞ芽さん、おかしいじゃない。両家ともの当人たちが不
満なお見合いなんて、する意味が分からないもの。

すゞ芽　そうなの……？　だからって、さすがにお相手の前なんだから、はしやぎすぎ
ちやだめじゃないの。

織乃 あ。わたしったら、ご無礼を。

響一郎 ああ、いいですよ。いや、いいのかな……。

織乃 ……そうだ、響一郎様、これでは非、わたしのことをお嫌いになつてくださいますし。

響一郎 え？

すゞ芽 ちよつと織乃さん？

織乃 そして、わたしの悪評を、牧野議員にもお伝えください。わたしが、牧野家にはふさわしくない人間だとわかれば、きつとお見合いを取りやめてくださいます。そうなれば、全てが丸く収まるんです。

すゞ芽 何それ、全てって何？

織乃 だってそうじゃない。ねえ、響一郎様も、その方がご都合よろしいでしょう？

響一郎 俺は……、

紡 それは困る。

全員、紡を見る。

織乃 ……え？

紡 こいつの決意はどうなる？ その提案は、見合い一つの話では済まないはずだ。そうだろう、響一郎。

響一郎 あ、……ああ。

織乃 あの、申し訳ありません……。

響一郎 …………御令嬢、いえ、織乃さん。正直に言うと、確かに私は、六歳下のあなたと見合いするのが不満でした。けれど、こうしてあなたに直接会って気づいたのです。年は関係ない。あなたは賢く、可愛らしい人だ。照れくさいので芝居がかつてしまうけれど、本当です。だから、あなたがそんなにも見合いを避ける訳を、教えていただけませんか。私の事が不満というわけではないのなら、尚更。何か、力になれるかもしれませんから。

織乃 ……。……ごめんなさい。わたしはまだ、そんな風に素敵な言葉を使えるほど、大人ではなくて。だから、正直に、ひどいことを言っていますけれど。

響一郎 ……構いません。

織乃 このお見合いをしてしまったら、結婚が決まってしまうでしょう？ これは、そういう事情ですもの。

響一郎 ええ。

織乃 でも、それでは困るんです。わたしは、大学に行きたいんです。勉強して社会の一員となり、働いて、働किながら恋愛して、結婚しても働くんです。それが、私の夢なのです。

響一郎 ……。

すゞ芽 あの、織乃さんは、本気なんです。それで家出して、自分でお金を稼いで大学

響一郎 に行こうと仕事を探して、こんなところまでわかりました。

織乃さん。どうでしょう、結婚の時期は遅らせるし、あなたが望まないのに家庭に入れとは言わない。そう両家に掛け合ってみるというのは？

そんなこと、できるはずありません。

できますよ。私に任せてください。弁が立つとだけは言われるのです。

でも、

それから、恋愛の方も。

え？

私と、恋愛しませんか。

……は、

(びっくり)

お互いに、好きになりましょう。

すきに？

そう。恋愛結婚です。好きになつて結婚しましょうよ。さあ、そのためには、まずどうしたらいいと思いますか？

えっと……。

織乃、すぐ芽を見る。すぐ芽、はつとして頷く。

よく知つて、好きになるためのお見合い……？

ありがとう。そう、まずは、お互いのことを知らなければ。だから私のために、今回のお見合いに来ていただだけませんか？

響一郎、織乃を期待のこもった目で見つめる。

えっ。

織乃、すぐ芽、顔を見合わせる。

だめですか？

だ、めじゃないです！

よかった。本当によかった！ 来てくれるんですね！

はい、

ついでに今日はこのまま、私がお家までお送りしてもよろしいですか？

え、もちろんお願いできるなら……？

やった、道中お話させてください。紡は、そちらの彼女を送ってあげてくれ。わかった。

さあ、もう遅いですから、急ぎましょう。お家は、東区ですよ。

あ、はい。

響一郎、織乃を連れて、喋りながらはける。

舞台上に残されるすゞ芽、紡。
すゞ芽、紡を見る。ちよつと見つめあう。

紡 (同時) 家は、

すゞ芽 (同時) 何が起こったんでしょう！

その、わたしが何を言っても、聞かなかったのに。

紡 ……響一郎はよく喋る。言葉で、彼女の心配ごとを一時的に吹き飛ばした。不安で動く人を止めるには、不安を取り除いてやるしかない。

すゞ芽 そんなの……。

紡 彼女の夢が、理解できないか？

すゞ芽 え、

紡 ……。

すゞ芽 (頷く)

紡 それでも、彼女を置いて帰らなかったのは、正しかったと思う。

すゞ芽 正しいとかじゃなくて、できるわけがないでしょう。織乃さんは、友達なもの。

紡 友達なら、探り合いはするべきじゃない。

すゞ芽 探り合いだなんて。……そんなつもり……。

紡 家はどこだ。

すゞ芽 えっ……と、南区です。

紡 そうか。道順は？

すゞ芽 (首を横に振る。)

紡 わかった。一度大通りに出よう。

紡 紡、はけ口へ歩き出す。すゞ芽、動かない。

紡、すゞ芽を振り返る。

紡 すまない。あまり離れないでほしい。見失う。

すゞ芽 あ、すみません。

すゞ芽、紡に追いつく。

すゞ芽 ごめんなさい。

すゞ芽、紡、はける。

〇 九

織乃、響一郎、出てくる。

所変わって、織乃の家の前。

響一郎 こんにちは。お初にお目にかかります。牧野響一郎です。御令嬢をこんな夜更

けまでお帰しませんでしたこと、誠に申し訳ございませんでした。

響一郎、喋りながら、織乃と一緒に会見の位置に移動。

織乃父と響一郎父が入る。父たちは、複数人の役者が集まり、大きな人間を形作って、抽象的に演じる。

響一郎

今日のことについて、御令嬢を叱らないでいただきたいのです。どうか、この牧野に免じて。それにしても、この道中、御令嬢とは本当に楽しい時間を過ごさせていただきました。ご聡明なことももちろん、《相性がよかったのか、かなり話し込んで》（括弧 ≡ 部分で、徐々に織乃父と台詞を交代）

織乃、織乃父、響一郎、響一郎父、お見合いの位置に座ってお見合いの場面に。

織乃父

《相性がよかったのか、かなり話し込んで》しまったと、全く、お世辞が上手でいらつしやる。

響父

お世辞などでは。感じのいいお嬢さんだと聞きました。

織乃父

そちらの御子息は、音楽学生でいらつしやるそうで。

響父

お恥ずかしい。政治の勉強は独力で続けるのを条件に、わがままを飲んだ次第です。それに比べて、お嬢さんは、

織乃父

女子

響父

であるのに

織乃父

慎みがない。

響父

聡明でいらして、仕事を

織乃父

結婚より

響父

したいんだという、

織乃父

それでうまくいくのか

響父

実に今風でいらつしやると、

織乃父

だから、

織乃父

（同時に）響一郎君から聞いた時は、安心しました。

響父

（同時に）響一郎から聞いた時は、感心しました。

織乃父

（同時に）では、後は若い二人に。

響父

（同時に）では、後は若い二人に。

織乃父、響父、役者はバラバラになつてはける。

響一郎

織乃

ね、できると言つたろう？ 両家の当主は共に、君の夢を尊重するつもりだ。まさか、本当にうちの父まで納得するとは思っていませんでしたので、驚いております。響一郎様、

響一郎

他人行儀はよろしくない。まずは、対等に立たないと。

織乃 そんな、やめてください。わたしなんか、響一郎様と対等だなんて。意外と、自分を下げたがるんだね。初めて会ったときは、もうちよつと堂々としていた気がするのだけど。

織乃 あの日、必死でしたから。それに、下げたがっているんじゃない、わたしは、事実下にいるんです。

響一郎 ふうん。しかし、俺たちは恋人だろう？ 君に親しく呼んでもらうのを、楽しみにして来たんだ。

織乃 ……わたしに気がある演技は、よしてください。ご無理をなさっているでしょう？

響一郎 やっぱりばれていたのか。でも、そういうのって、気付いても言わないものじゃないのかい？

織乃 わたしばかり、望みをかなえてもらっていては、いけませんから。

響一郎 そう。でもせめて、敬語は取ってくれないか。じゃなきゃ、既にこんな口調の俺が、無礼者になってしまうだろう？

織乃 ……はい。

響一郎 ん、

織乃 ええ。響一郎さん、

響一郎はどうだろう。

織乃 響一郎さんで。

響一郎 さんか。

織乃 響一郎さん。ありがとう。

間。

響一郎 いいや。

織乃 ねえ、お聞きしたいことがあるのだけど。

響一郎 いいよ、何？

織乃 独力で、政治のお勉強をしているの？

響一郎 ああ。俺は長男だから、将来は父を継いで、議会に出なければならぬ。音楽家にはならないの？

響一郎 まさか。ならないよ。

織乃 でも、せっかく大学でも学んでいるのに。

響一郎 それでも、そんなに簡単な道じゃないさ。

織乃 そうなのね……。

響一郎 さんの演奏、聞いてみたいわ。

響一郎 嬉しいことを言ってくれるなあ。それが本当なら、ちようどいい！ 来週、年に一回の大学演奏会がある。だけど、昨今の事情で規模が小さくなって、招待客しか入れなくなつたんだ。よかつたら招待するけど、来てくれるかい？ 俺は今年で卒業だから、今回が集大成になるんだ。

織乃 集大成？ 素敵だわ。よろしいのなら、ぜひ。

響一郎

やった。紡と一緒に出るんだ。あいつの作った曲を、二人で演奏する。俺のソ

織乃

……楽しそうね。

響一郎

もちろん。

織乃

そう、楽しみだわ。

響一郎、はけて、織乃、立ち上がる。

すゞ芽、響一郎と入れ替わりに出てきて、響一郎が居たところに立つ。

歌子の喫茶店のセットが出てくる。

セットを設置し、すゞ芽、織乃が椅子に座ると、喫茶店の場面へ。

すゞ芽

わたしも行っているの！？

織乃

ええ。響一郎さんが、二人分の席をとってくださるって。

すゞ芽

本当！？ すごい！ どうしよう、演奏会なんてわたし初めて！

織乃

オーケストラや声楽もあって、沢山演奏されるらしいのだけど、中でも紡さんの曲は別格だそうよ。紡さんは、演奏会について何かおっしゃってなかったの？ あの日、一緒に帰ったのでしょうか？

すゞ芽

あの日は……。

織乃

え？

すゞ芽

あ、ううん、あの日は何も。あんまりおしゃべりしなかったの。

織乃

そうなの？

すゞ芽

まあ……。

歌子、すゞ芽たちのテーブルにお茶を運んでくる。

歌子

大学演奏会に行くのかい？ あたしも行くんだよ。

織乃

まあ、歌子さんも？

歌子

前に話したろう？ 芸大の先生に知り合いがいるって。

織乃

それにしても、織乃ちゃんも隅に置けないねえ。音楽学生 of 恋人かい。

歌子

いえ、その、以前お話ししたお見合い相手です。

織乃

ああ、大騒ぎしたやつね。

歌子

……申し訳ありませんでした。

織乃

いや、こういうのはね、笑い話にした方がいいんだよ。何であれ、丸く収まっ

歌子

たようでよかったね。

織乃

そうですね、ひとまず、わたしの方は……。

歌子

え？

織乃

いえ、なんでもありません。

すゞ芽

……ねえ、織乃さん。

織乃

何？

すゞ芽

……ううん、やっぱいいい。

芸術大学のホール。演奏会の場面。以下、コンテンツポラリィダンスを駆使して場面を表す。身体表現と言った方がイメージしやすいかもしれない。

初めに、挨拶がわりの祝詞がある。

祝詞

《ルンタタルンバイ 音男神 舞姫神 の祝福を》

オーケストラによる演奏。役者たちによつて、リズミカルな場面が作られる。演奏は賑やかに、楽しくのびのびと。楽器と奏者が目の前で動く、演奏会独特の臨場感と、全身を包みこむ音の響きを表現。

紡と響一郎の演奏に移る。二台ピアノの演奏曲を想定しているが、「一」の場面で使った曲がサン＝サーンス 交響詩「死の舞踏」でない場合、使った曲に楽器や演奏形態を合わせる。
一度、紡と響一郎のみで場面を作り、その後は二人をメインに他の役者も加えて、より迫力ある世界観を作る。今までのダンスよりも、人の心に溶けこむようなやさしさをもち、しかし説得力とどこか切なさを感じさせるダンスで。

すぐ芽、織乃登場。ダンスで彩られた舞台を、ダンスを見ながら（演奏を聞きながら）練り歩く。不思議の国に迷い込んだアリスのイメージ。

すぐ芽、演奏を聞いて、歌子の喫茶店で聞いた曲と、作曲者が同じであることに気づく。

自然に、響一郎のソロに移る（この時、紡とすぐ芽ははけ、舞台上には織乃と響一郎）。楽しみながら、生き生きとした演奏。舞台全体を使って踊り、一人演奏に没頭する。

織乃、響一郎の演奏をじっと聞いている。

演奏会が終わりに近づく。響一郎、織乃ははけ、他の役者たちだけでもう一度場を盛り上げる。その後、舞台上にいる人は、だんだんと少なくなっていく、最後にすぐ芽だけが残って踊りだす。
すぐ芽が踊っているまま、一旦暗転。

大学演奏会後のホール。片付けが終わったステージ上で、すぐ芽が勝手に踊

っている。無音。すゞ芽の頭の中には、演奏会で聞いた紡の曲が流れている。すゞ芽、曲を思い出して、鼻歌を歌いながら、くるくると回り踊っている。紡、出てくる。
明転。

紡 そこからは転調する。同じ振りの繰り返しは好みじゃない。

すゞ芽 わかるの？ 何を踊っているか。

紡 鼻歌に出ている。

すゞ芽 嘘。

紡 一人で何をしている？ 学外の人間が、ホールを自由に使つていいとは思えない。

すゞ芽 織乃さんは響一郎さんのところに行っちゃったし、歌子さんも知り合いの先生に挨拶に行っちゃったから、帰ってくるまで待つているんです。一度は、外に出たのだけれど、ここの片付けをしていた人がずっと外で待つのは辛いだろうって。

あなたは？ どうして戻ってきたの？

紡 響一郎の邪魔をしてはいけない。

すゞ芽 あら、一緒なのね。そうだ、ちょうどあなたに聞きたいことがあったの。

紡 なんだ。

すゞ芽 泣いている曲を作ったの、あなたでしょう。歌子さんの喫茶店で聞いたわ。

紡 先生の話にあつた女学生というのは、お前か。

すゞ芽 お前じゃないわ。すゞ芽よ。

紡 すゞ芽。

すゞ芽 ねえ、あの曲の主題って何なの？ どうして、あんなに泣いているの？

紡 主題は、ダンス・マカブルだ。

すゞ芽 ……は、不謹慎な曲を作るわね。

紡 違う。ダンス・マカブルは、本来中世末期に流行した詩や絵画のモチーフ。メント・モリーの思想を基盤にした芸術主題だ。

すゞ芽 ……うん？

紡 メメント・モリー。死を想え。

すゞ芽 なるほど。それで、ああも必死な感じなのね。

紡 なぜ、作曲者が俺だとわかった？

すゞ芽 そりゃあ、わかるに決まっているわ！ あなたの曲って、聞けば体が踊りだすもの。あれ、待って違うの、よくあるやつじゃないのよ。なんて言うのかしら。

もっと強制的なの！ でもなぜか気分はいいのよ。こんな曲を作れるなんて、あなたすごい人だったのね！

紡 ……すごいのはすゞ芽だ。それから響一郎。曲は演奏者によつて変わり、曲の感想は聴衆によつて変わる。すゞ芽がそう感じたのなら、それはすゞ芽に、そ

う感じる力があつたからだ。

すゞ芽 そうなの？ でも、それにしてはわたし、こんなに強い感覚初めてだわ。だか

紡　ら、あなたすごいよ。

……？

紡　やだ、困らないで。大人しくありがとって言えばいいじゃない。

紡　ありがたい。

紡　こちらこそ、素敵な曲を聞かせてくれてありがとう。

紡　面白いな。こうやりとりすると、楽しんでくれたなら何よりだと思える。

紡　それ、いつもは思っていないみたいだわ。

紡　まあ。

紡　そうなの？　変ね。音楽って、楽しむためのものなのに。どうして？

紡　（ちよつと思案して）　すぐ芽には言いたくない事情がある。

紡　そう。

……。

紡　あなた面白いわね。わたしに言いたくないことを、わたしに言いたくないから、
と言って断る人を見たのは、わたし初めて。

紡　すまない。余程気心の知れた仲でない限り、言いたくない。

紡　それも初めて！

紡　でも、いいわよ。言いたくないことって、誰だってあるもの。

紡　織乃さんとは、話したか？

……。

紡　わかった、あなた、会話が下手なのね。

紡　すまない。気になってしまつて。

紡　なるほど。そうね。

紡　話してはいないわ。

紡　わたしには言いたくないことだったら、どうしよう。

紡　仲は良さそうに見えたが。

紡　仲はいいわ。学校で一番仲がいいのよ！　でもほら、仲がいいからって、何で

紡　も話せるとは限らないわ。

紡　確かに。しかし、少し早い。

紡　何が？

紡　言つたはずだ。相手を知りたいのなら、まずこちらから聞く努力を怠るべきで

紡　はない。仲のいい友達なら、それができる。

紡　……聞く努力？

紡　そうだ。音が曲になるのは、

紡　紡、手を叩く。

紡　それを曲だと思つて聞く人がいるからだ。

紡　紡、手拍子を数回する。そのあと、足踏みも含めてリズムカルに続ける。すぐ
芽も真似して、手拍子や足踏みをしてみて、楽しくなつてやがてボディパー

カッションのセッションのような形になる。(台詞の邪魔にならないように音を出すタイミングを調節してください。)

紡

俺は口下手だが、曲は俺の分までよく話す。

ダンスは、曲の話を聞いて目に見える形に現してくれる。

すゞ芽の動きに、ターンやステップが混ざってくる。

紡

だから、俺はダンスが好きで、舞曲ばかりを作るんだ。

ボディパーカッションおわり。

すゞ芽

すっごい。

紡

すゞ芽はダンスを踊れるから、織乃さんの話も聞けるはずだ。

すゞ芽

そうかしら。そうだといいわ。

なんだか少し元気になれた。ありがとう。

ホールの入り口から、弦作と歌子が出てくる。

弦作

あー、いた。紡君。僕は響一郎君を呼んでくるように頼んだんですよ。それなのに……あれ、おもりですか？

歌子

先生、言い方。

すゞ芽ちゃん、彼と一緒に居たんだね。

すゞ芽

歌子さん、その方が、お知り合いの先生？

歌子

そうだよ。例の曲を作曲した学生さんたちに会わせてもらう予定だったんだけどね。なかなか二人揃わないから、あんたたちを待たせすぎても悪いし、一度戻ってきたんだ。

弦作

ああそうか。歌子さん、この子がそうですか？

歌子

はい。

弦作

紡君、彼女が、前に言った喫茶店の女学生さんですよ。

紡

存じております。

弦作

なぜ。

紡

先生、響一郎は今、所用で出ております。

弦作

え、そうなんですか。

歌子

そうだ、あんたも、織乃ちゃんは？

すゞ芽

それが、今どこかで……。

すゞ芽、紡を見る。

歌子

なるほど。

弦作 歌子さん、どうしましょう？ 研究室で待ちましょうか。
歌子 いえ、先生。悪いですから、またの機会にします。
弦作 あれ、いいんですか？
歌子 ええ、あまりお時間をいただくわけにはいきませんから。織乃ちゃんの方は、お任せしても大丈夫なんだろう？
紡 はい。
弦作 え？
すゞ芽 織乃さん、置いて帰るの？
歌子 任せて帰るんだよ。邪魔しないようにね。
弦作 ちよつと話が読めない。
歌子 じゃあ、先生、本日はありがとうございました。
弦作 え、いえいえ、こちらこそ、段取りが悪くて申し訳ないです。ではせめて、外までお送りますよ。こつちへ。
(紡へ) ……え？ どういうこと？

全員、はける。

〇 十二

大学内のあまり人がいない所。織乃と響一郎が話す。

織乃 素敵だったわ。演奏会。

響一郎 そうかい？ 楽しんでくれたのなら、何よりだよ。

織乃 響一郎さんも、とても楽しそうだったわ。一番楽しそうだった。

響一郎 そりゃあ、最後だったからね。

織乃 ……そうかしら。音楽が好きだからでしょう。最後だとか、考えていなかったでしょう。

響一郎 え？ まあ、そうだね。

織乃 響一郎さん。

響一郎 嘘をつかずに、教えてほしいことがあるの。

響一郎 う、うん。何？

織乃 あなたの夢って、音楽家よね。

響一郎 ……いいや。

織乃 嘘つかないでって言ったでしょう。

響一郎 ついていないよ。

織乃 あなたが、牧野議員の跡継ぎとして、難しい立場にあるのは十分承知しているわ。でもあなたは、わたしの夢は叶えてくれようとするのに、自分の夢は蔑ろにしてしまうの？

響一郎 ……本当に嘘はついていないんだよ。昔は、音楽家が夢だったさ。だけどそれは、大学に来て肥大して、現実味がなくなった。今の俺の夢は、眠った時に見

織乃

る夢といわば同じさ。それが実現することを望みやしないんだよ。夢が肥大した？

響一郎

もっと欲深くなっただけのこと。

織乃

でも、あなたなら、なんとかできるんじゃないかしら。

響一郎

誤解しないでくれ。君は、俺に夢を叶えてもらったと思っているみたいだが、俺は君が思うほどすごい人ではないんだ。

織乃

そんなことないわ。

響一郎

いいや。俺をすごく見せているのは、俺と君との年の差だよ。

織乃

……響一郎さんは、結局、わたしのことを恋人だと思ってはくれないのね。へ？

響一郎

ぐずる子どもぐらいにしか思っていないんでしよう！

織乃

ちよっと待って！ 惚れているふりはしないでいいって言ったよね！

織乃

でも、恋人扱いしてくれないと、わたし、恋愛結婚できないじゃない！

響一郎

確かに！

織乃

冗談じゃなくて、わたしも、あなたの力になりたいと思っているのよ。だからせめて、その欲深い夢とやらを教えてくださいな。それを知らずに、夢が叶わなくていいなんて、納得できないもの。

響一郎

そこまで言うなら……、絶対に秘密でお願いするよ。

響一郎、自分の夢の内容を具体的に耳打ち。

織乃

確かに、大変な夢ね。

わたしも同じ立場なら、この夢を叶えようとは思わないかもしれないわ……。でもそれなら、本当の今の望みって何？

響一郎

今の望み？ 俺の？

織乃

ええ。響一郎さんが時々苦しい顔をするのは、望みを我慢しているからだと思っ

響一郎

ているのだけ。

織乃

苦しい顔？ 俺が？
そう。例えば、音楽の話をした後でしょ、演奏をした後でしょ、それと、

織乃、響一郎の目をずっと見る。

織乃

ほら、わたしと面と向かい合った時。

響一郎

嘘でしょ。

織乃

いいえ、わかるわ。わたし、響一郎さんのこと好きなもの。

響一郎

嘘でしょ。

織乃

きつと、夢を諦めようと無理なさっているんだと思っていたのに。そうじゃない

響一郎

いいや。俺には、望みも悩みも心当たりがない。悩みは多少あったかもしれない

いが、それも既に折り合いがついている。苦しい顔なんて……いや、君を疑う

わけじゃないが…。
織乃 悩みに、折り合いだなんて。

響一郎、織乃に背を向ける。

響一郎 いくら悩んでも、大学を出た後の俺にあるのは一本道だ。父の後を継ぐという道。反れる余地もない道なら、悩むより、よりその道を楽に進む術を探す方がいいだろう。だからこれは、悪いことじゃないんだ。

響一郎、織乃を振り返り、織乃の後ろに帽子が近づいているのに気づく。

響一郎 あなたに聞かせたい話じゃない。
織乃 え？

帽子 失礼。響一郎様を探していたのです。お話し邪魔をするつもりはなかった。
織乃 あっ、先日の。

帽子 ごきげんよう。仕事はもういらないのかね。

響一郎 私に、どのような要件で？

帽子 演奏会の感想を、一言伝えたかったまでです。素敵な演奏でした。

響一郎 演奏会には、招待客しか入れないはず。一介の役人が、どなたから招待を受けて？

帽子 大学から。

響一郎 大学……！？

帽子 ところで先ほどの話について、私からも、申し上げてよろしいでしょうか。

響一郎 何です、藪から棒に。

帽子 いえ、嘆かわしいと思ひましてね。悩みに折り合いをつけるなど。女学生でも、非道とわかる。

響一郎 大仰な言葉選びですね。しかし先にも言った通り、私は不都合を感じておりませんよ。

帽子 警告したいのです。
響一郎 は。

帽子 よろしいか。悩みは折り合いをつけるものではない。発散するものです。折り合いをつけようが、解決しようが、悩み続けようが、悩みというもののそれ自体が持つ負のエネルギーは体に不調をもたらします。負のエネルギーを発散せず、単に悩むことをやめただけでは意味がない。

響一郎 何を言っているんです？
帽子 警告します。このままでは、貴方はいずれ発狂するでしょう。
織乃 なんですって？

響一郎 ……ダンス・マカブルのように、ですか？
帽子 私があなたを探していたのは、演奏会の感想を伝え、ある場所にあなたをお連れするためでした。あなたも、興味がおありでしょう。地下のダンスホール。

響一郎

……。

織乃

地下って……。

帽子

そう、私の仕事場ですよ。

響一郎

本当に国が運営しているのか。

帽子

牧野議員の御子息が音楽をやっていると聞いた時から、ぜひ共に仕事をした
いと考えていたのです。しかし、どうやら仕事の前に、貴方には客として、あ
そこを利用する必要があるそうだ。

響一郎

話が見えないんだが。

帽子

来ればわかるとも。ね。

帽子、織乃に目配せをする。響一郎は、それに気づいて織乃を庇う。

響一郎

やめてください。彼女はもう、仕事を探していない。

帽子

ダンスホールについてだけでなく、この国の現状や、ダンス・マカブルについ
てさえ、あの場に行けば全てを察することでしょう。さて、彼女には、わから
ないことを知るために、あの場に赴こうとする行動力がありました……。

響一郎

つまらない挑発はやめてください。わかりました、行きましょう。

織乃

織乃さん、すまないが、これ以上の話はまた今度にしよう。

響一郎

響一郎さん。あの人について行ってしまおうの？

織乃

なに、心配ないさ。俺は君よりずっと年上だし、男だからね。

織乃

さっきの警告というのが気になるわ。わたしも一緒について行ってはだめか
しら。

響一郎

だめだ。次に会った時にきちんと話すだろうから、今日はお友達と帰っておく
れ。

織乃

……わかったわ。どうか、お氣をつけて。

響一郎

もちろん。

響一郎、帽子に向き合う。

響一郎

さ、地下のダンスホールでしたっけ。

案内をお願いします。

○ 十三

場面転換。

帽子、響一郎は、舞台上の高い所から、下を見下ろす。地下へと続く階段の
途中に立っているイメージ。下には、地下のダンスホールの様子が見える。
ダンスホールは、所謂「舞踏会」と「クラブ」の中間のようなものをイメー
ジするとよい。昔と現代が入り混じった独特の世界観。例えば、踊っている
人たちの服装はロマン風だが、ダンスは社交ダンス、バレエ、現代的なダン

スが雑多に入り混じる。中心には、現代的なダンスで場を盛り上げる人たちがいる。照明、音響は、クラブのように派手に。

響一郎

これは。

帽子

集団舞踏はダンス・マカブルを誘発する。危険じゃないのか！

響一郎

よく見るのです。お客たちの顔を。

帽子

半狂乱にしか見えないな。

しかし彼らは、一步ホールの外に出れば、正気を保って勤勉になる。

響一郎様、人々が狂乱状態で命尽きるまで踊り続ける、あのダンシングマニアという現象は、集団ヒステリーです。この国の不安が引き起こす、精神病なのです。

響一郎

不安ですって？

帽子

政治、環境、健康、それらの不安は、常に人々を悩ませてきました。それらの悩みを、この国の民は伝統的に、ダンスによつて発散してきました。しかし一年前、特に不安に敏感であった村がダンシングマニアを起こして以来、そのダンスも規制の対象となった。当初は私も、規制が最善の選択だと考えていた。しかし、それは間違いだったのです。悩み続ける人々から、発散する術を奪うのは逆効果だと気づいた。そこで我々は、国の監視下で人々が踊るための場所を作った。それがこの、ダンスホールなのです。

響一郎

ダンスを許可するにしても、監視下である必要があるのはわかる。でもなぜ、地下で秘密裏に行うんだ。

帽子

こうして運営しておりますが、私の説はまだ仮説の段階。これが立証されるまで、ここはあくまで、実験的施設であるのです。大々的な発表が行われるまでは、不安の崖の縁に立っている者だけが、噂をたどって、この場にたどり着くことができる。

響一郎

俺にも、あの人たちと同じように、発散が必要だと言うのですか？

確かに、この国の現状は危うい。しかし、国家の危機とは、何も特別珍しいことではないでしょう。俺は、取り立てて悩んだりしていません。

帽子

何も、人々が国の現状それ自体を憂いているとは言っていないよ。

響一郎様、貴方がしていた話は分かりやすい。夢を諦め、望みすら抱けなくなったのに、不都合を感じない。それこそ、不安を感じている証ではありませんか。人々は、「何かをしたい」と望むことができなくなっている。この時世は不安定で不健康で、人々は生きることが優先するあまり、やりたいことはない、そう言う他ないのです。皆、気づいてしまうのですから。一本道しかないよね。

響一郎

そうです。一本道しかありません。だから私には、望みがない。望みがないので、悩みはしません。

帽子

響一郎様、望みとは、何かを「したい」、というものだけではない。何かを「したくない」、というのも望みなのです。

貴方は、夢を叶えたいと思っではないかもしれない。しかし、夢を叶えたく

響一郎

ない、とも、思っていないのではありませんか？ 貴方の悩みはそこにある。貴方は、夢を叶える気はないはずなのに、夢を手放したくないと、望んでいるのです。この望みが、貴方を悩ませているのです。

俺は悩んでいません。

俺は、悩んでいません。この夢は、叶えることができない。それは十分に十分にわかっているのです。手放すのが嫌、なんて。そんな望み、抱いたってしょうがないじゃありませんか。手放すしか、道はないのだから。望む道の無い望みを、俺は望みません、もちろん。俺に悩みはありません。そうです、俺に悩みなんてあるはずないじゃないですか。ああ、そうだ、ご忠告ありがとうございます、ます。いいや、心配してくださったのかな？ とにかく、

帽子

響一郎

帽子

俺が喋ってるじゃないですか！ ……なんですか？
人は、そんなに物分かりのいいものではありませんよ。

間。

響一郎

これか。これが、ダンス・マカブルか。この感情が、ダンス・マカブルの正体なのか！ これが、人をあんなに狂わせて、死ぬまで踊らせているんですよ！

帽子

ああ、確かに、耳に音楽が流れてくるだけで、気が飛びそうだよ。あんなに好きな音楽なのにな。耳から脳を犯しているようだ。うるさくつてしょうがない。それはいけない。一度耳をふさぎ、冷静になりなさい。そして、階下の客たちを見るのです。

響一郎

帽子

ここは、既に彼らの生きがいがあります。
生きがい、ここが。
そう。貴方自身もこの先、生きていく上でそうなります。ここを抛り所にしなさい。この国は、今まで、そうやって生きてきたのだ。

暫し、ダンスホールの客たちが舞台上でメインに動く。ダンスホールの様子を見せる、また、響一郎が落ち着き、思案するための間。

ダンスホールの客たちは悩みを発散しに来ている。客たちは狂乱しており、琴線に触れれば死んでしまいそうに見える。ここを抛り所にし、不安を抱き続ける生き方が正しいのかどうか、それを推奨する国が正しいのかどうか。

響一郎

帽子

国が。

このダンスホールをもっと活用するために、貴方が大学を卒業した暁には、音楽面における協力を頼みたい。試しに、都合がつく時に、ここへ通ってみませんか？ 踊るのが難しければ、ピアノでも。

響一郎

あんた、何者なんだ？ なぜ大学に呼ばれた？ なぜ、ダンスホールを作ることに加担、いや、主導している？

女の人が踊るじゃない？ だから、何が違うの？

すゞ芽
織乃

何が違うのかしらね！

わざわざ苦手なことをしなくても、って自分でも思うんだけど……。

すゞ芽

そんなこと無いわ！ 誰かのために頑張りたいって、すごいことじゃない！ 響一郎さんだって、織乃さんが自分のために頑張ってくれたって知ったら、それだけでも大喜びすると思うわ！

わたし、いっぱい協力するわね！

………やっぱり、いいわ。

織乃
すゞ芽

え？

織乃

学校でも散々ダンスを習っているのに、これだもの。きっと無駄よ。

すゞ芽

どうして？ そんなことないわ。

織乃

どうしてそんなことないと思うの？

だって、織乃さんが頑張るって言ってるんだから、無駄になるはずないじゃない。

織乃

気持ちの問題じゃないのよ。

すゞ芽

何？ どういうこと？

織乃

いいわ。ごめんなさい。忘れて。

すゞ芽

……あのね。わたし、織乃さんが思ってること、もっとちゃんとやってほしいわ。

織乃

え？

すゞ芽

いつも、いつも、わたしが聞いても、そうやって誤魔化すでしょ。

織乃

いつもって……

すゞ芽
織乃

言ってくれないと、わからないの。ごめんなさい、織乃さん。わたし、織乃さんが何を考えてるのかわからないの！

すゞ芽
織乃

そりや、言わないとわかってもらえないことくらい、わたしだってわかってる。なら、どうして言ってくれないの？

織乃

……わかってほしくないんだもの。

すゞ芽

どうして？

織乃

すゞ芽さんには言いたくないことなの。

すゞ芽

……。

織乃

どうして？

それに、言ったってわからないわよ。すゞ芽さんとわたしってね、すゞ芽さんが思っているよりずっと違うわよ。だから、

織乃、すゞ芽が泣き出しそうなことに気づく。

すゞ芽

わたしじゃだめなの？ わたしじゃ、織乃さんの力になれない？

織乃

何よ、泣くの……？ あなたが聞くから答えたんじゃない。

歌子

あーっ、もう、店で喧嘩すんじゃないよ。すゞ芽ちゃん、人と話す時は、泣い

たら負けだよ、何も進まない。二人とも、奥行きな。ゆっくり話してくるんだよ。

歌子の喫茶店の奥の部屋。何もない場所。すぐ芽と織乃の二人きり。すぐ芽は泣くのをこらえている。

どちらから話すか、互いに相手の様子を伺う間の後、すぐ芽が口を開く。

すぐ芽

わたしから、話してもいい？

紡さんが、友達なら探り合いはするなと言っていて、

次また気持ちを誤魔化されたら、聞く努力というのを、しようと思っていたの。でも、わたしたち、本当に友達なのかなあ。

話すよ？

いい？

……わたし、織乃さんのこと、一番の仲良しと思ってる。けどどうしてそうなったのか、思い出せないの。いつのまにか話してて、いつのまにか遊んで、だからもし織乃さんがわたしを友達と思っていなくても、仕方がないことかもしれない。だから、わたしに話せないの？ 何も、話せないの？

隠してる気持ちがあるのはわかるわ。わたしは、聞きたいと思ってる。

すぐ芽

ねえ、なぜずっと黙っているの？

何も言えない仲なんて、……友達と言っちゃ、いけないわ。

織乃

どうしてそうなるの！？ 友達でいるために黙っているのに！

きっかけがわからないですって？ そういうものでしょう、友達って。すぐ芽さんは、大事な友達。わたしだってそう思ってる。すぐ芽さんに話さないのはただ、すぐ芽さんに言っても仕方がないから。あなたは何も悪くない。わたしが勝手に傷ついてるだけ！

すぐ芽

勝手ね！ 道理でわからないわけだわ、

織乃さんが勉強したいわけが。

織乃さんが働きたいわけが。

織乃さんが恋したいわけが。

家出するし危険だし止めても聞きやしないのに、

ダンス頑張る言ったそばから勝手にすぐにやめちゃうし。

勝手にやるし勝手に止まるし勝手勝手なんにも言わない！

勝手に傷つくって何？ 鎌イタチだって風のせいよ。

織乃さんが傷ついているなら、わたしのせいに決まっているじゃない！

織乃

すぐ芽さんは悪くない。それを説明すればいいのね。

すゞ芽

え？

織乃

じゃあね、すゞ芽さん、あなた、ダンスが上手なのをやめて頂戴と言ったら、やめてくれるのかしら？

ほら、無理でしょう？　どうこうできるものじゃないもの。すゞ芽さんは悪くない、すゞ芽さんに言っても仕方がないとはそういうことよ。

ダンスが下手で、価値のない女。それが勝手にあなたを妬み、一人で傷ついているだけ。

すゞ芽

織乃さんに価値がないわけない。

織乃

そういうのも、やめて頂戴。すゞ芽さんがわたしを褒めたり、自分を謙遜したりする度にみじめになる。

ダンスが上手なすゞ芽さんは、この国で生きにくいなんて、考えたこともないでしょう。それでわたしの言動が、理解できるはずもない。

わたしね、家の力で結婚すれば、わたしの価値は一生見いだせないままだと思った。こんなわたしじゃ、いっそお相手に迷惑がかわると思ったわ。

せめて自立して認めてもらって、人に好かれてみたかった。でも、こんなこと、すゞ芽さんが理解する必要なかったのよ。その代わり、すゞ芽さんには、わたしとずっと友達でいてほしかったの。妬んでいるとは言ったけれど、わたしはすゞ芽さんが大好きよ。だから、こんな嫌われそうな気持ち、言うつもりなかったのに……。

すゞ芽

価値が無いとか、嫌われそうとか、やっぱり全部、勝手な思い込みじゃない。わたしは、織乃さんのことをそんな風に思ったことないのに、自分の価値を自分で下げて、妬んだり気を遣ったり、それで疲れているなんてあんまりじゃない！？　わたしと友達でいたいと言うなら、わたしの気持ちも無視しないですよ！

……。

そっか、

当然だわ、わたし、言っていないんだもの。

わたしも、謝らなくちゃ。

だからどうして。

織乃

すゞ芽

わたしが悪いことをしたからよ。あなたに気を遣うために、嘘で謝ったり褒めたり謙遜したりしないわ。わたし、気を遣う時は黙りこくっちゃうもの。

だからわたし、今まで、自分の気持ちを織乃さんに伝えていなかった。

織乃

すゞ芽さんの気持ち？

すゞ芽

うん。聞いて。織乃さん、わたしだって、織乃さんと友達でいたい。でもね、友達が隣で傷ついているのに、何も思わないわけじゃないの。織乃さんに気を遣ってもらうのも、我慢してもらうのも遠慮するわ。

織乃

でも、あなたを妬んでいますなんて、言えるはずもなかったじゃない。自分を妬んでいる人を、あなたは友達と思えるの？

すゞ芽

でも織乃さんは、わたしを好きだとも言ったじゃない。

織乃 言ったけれど。

すゞ芽 わたしも、織乃さんが好き。わたし、織乃さんが好きよ。織乃さんと、何でも言い合える友達になりたい。わたしといたら、楽しいって言ってくれるような、織乃さんの友達になりたい。

織乃 ……わたしも、すゞ芽さんの、楽しい友達になりたい。でも、わたしの自己評価はどうしても変わらないし、すゞ芽さんのことも、妬んでしまうと思うわ。それじゃ結局、あなたも、嫌な気持ちになるでしょう？

すゞ芽 うん……難しい。ちよつと座って考えてもいい？

織乃 ええ。

すゞ芽、織乃、隣りあって座る。

すゞ芽 わたしたち、お互い好きじゃない？

織乃 そうね。

すゞ芽 それでも友達になれないなんて、冗談じゃないわよ。

織乃 確かに。堂々と好きと言い合えるのが不思議なほどね。

すゞ芽 特に織乃さんは、わたしのことを妬んでいるのに好きなんて、おかしいと思わない？

織乃 それは、おかしくないわ。ダンスのことを思うと、すゞ芽さんはわたしにとって敵と言ってもいいけれど、

すゞ芽 敵。

織乃 すゞ芽さん自身は、敵じゃないもの。

すゞ芽 敵じゃないのね。

織乃 え？ わたし、どうしてすゞ芽さんが好きなの？

すゞ芽 えっ。

織乃 あっ。底抜けにいい子だわ。素直だし。やさしい。

すゞ芽 褒められた。

織乃 褒めたわね……。すゞ芽さんは？

すゞ芽 織乃さんを好きな理由？

織乃 うーん……確かに、難しいわね。好きな所はわかるけれど。一生懸命だし、しっかりしているし、やさしい。

織乃 そんなに素敵じゃない。

すゞ芽 嘘はつかないわ。あと、頭がいいし、行動力があるし、わたしとね、お話ししてくれる。

織乃 そんなことも？

すゞ芽 もちろん。あれ、何でこんな話になったのかしら。

織乃 でも、なんとなくわかったわ。思うに、妬むのと好きなのが両立しているのは、軸が二つあるからだと思うの。

すゞ芽 軸？

織乃 そう。ダンスに関する軸と、そうじゃない軸。好きな所を考えた時に、わたし

もすゞ芽さんも、ダンスが上手か下手かなんて、指摘しなかったじゃない。

すゞ芽

織乃

きつと、わたしとすゞ芽さんは、ダンスとは関係のない方の軸が似ているんだわ。だから、お互いに好きなのだと思う。

なるほど……すごいわ織乃さん。ねえ、

すゞ芽

織乃

え？

すゞ芽

わたし、織乃さんこういう話をするの、大好き。

織乃

……。わたしも好き。

久しぶりに、こんな変な話した気がする。

ごめんね、ごめんなさい、すゞ芽さん。迷惑かけて、ごめんなさい。

……そうね、ちよつと迷惑だった。

すゞ芽

ごめんなさい。あのね、一緒にいてくれて、ありがとう。

織乃

一緒にいてよかった。織乃さんと、いっぱい言い合えてよかったわ。

すゞ芽

よかった？

織乃

よかった。

すゞ芽

あ。

踊る？

織乃

景気づけに？ でもわたし、

すゞ芽

やっぱり、下手だとか気にしちゃうの？ 確かに人は、ダンスでどうこう言う

ことが多いけれど、わたしがダンスを好きなのは、それとは関係なくってね。

楽しければいいとだけ、心からそれだけ思っているの。

織乃

そう思えるのは、すゞ芽さんが上手に踊れるからよ。下手なら、それだけで踊

るのが嫌になるわ。

すゞ芽

そう……これが、軸の違いなのね。

織乃

ダンスに関する方の軸ね。

すゞ芽

でも、そうだ……響一郎さんはどうする？

織乃

そういえばそんな話だったわね。……下手な踊りを見せても、って思うのよ。

すゞ芽

頑張ったって気持ちがあれば大丈夫とか言うのはだめよ。ダンスが下手な人

にそれを言わないで。

すゞ芽

じゃあ、ダンス以外の方法を探す？

織乃

……それが堅実でしょうね。でも、その、恥ずかしいけれど、わたしにも懂れ

すゞ芽

ってものがある……。

織乃

乙女だものね。

すゞ芽

踊れさえすれば、楽しいことは知っているし。例えばすゞ芽さん、わたしにも

すゞ芽

踊れるような振付、できる？

織乃

……やってみましょうか。

すゞ芽

できるの！？

織乃さんが頑張るならね！

暗転。
次のすゞ芽と織乃の台詞に被るように音楽が流れだし、すゞ芽と織乃のやり取りと、BGMが入れ替わる。紡、響一郎が入ってきて、場面は自然に切り替わる。

すゞ芽

織乃さんが頑張るなら、わたしだってお手伝いする！

織乃

でも、わたし相当よ？ 相当下手よ？

すゞ芽

えっと、じゃあ、例えばこんなのどう？ 基礎練習を元にして……。

○ 十六

紡と響一郎の宿舍の部屋。

響一郎はCDプレイヤーのリモコンを片手に、CDで音楽を聴いているが、同じ個所を何度も繰り返し返している。

紡が部屋に入ってくる。

紡

なぜ何度も戻す。レコードが擦り切れる。

響一郎

いや、CDだよ。

紡

CD、だとしても、同じ個所ばかり聞く。

響一郎

ここが一番の盛り上がりだろう？ 次に行きたくないんだ。曲が終わってしまふ。

しばらくの間。何度も巻き戻されるCD。

紡、響一郎からCDプレイヤーのリモコンを取り上げ、音を止める。

響一郎

喧しかったかい？

紡

……何があった？

響一郎

「何があった？」なんて、そんなに俺の様子がおかしいかい？ 今日、織乃さんにも言われたよ。あ、もう昨日になるか。

紡

一昨日までは口も聞かなかつたろう。思い余って先生に相談した。

響一郎

……先生はなんて？

紡

精神的なことはわからないから、しばらく様子を見て……、……。

響一郎

それはまずい。大人しくするように努めよう。知り合いから、ピアノを弾きに来るように頼まれているんだ。外出できないと困る。なに、そう心配するなよ、紡。こここのところの俺は、考え事をしていただけだ。何も正気を失ってなどいない。

紡

……そのようだ。

紡、「話せ」と目で訴え続ける。響一郎はそれを見て、クスリと笑う。

紡 演奏会の次の日、お前は一人でここに、目に狂氣をもらって帰ってきた。どこで、誰からもらなかったんだ。

響一郎 もらったんじゃないぞ。元来俺が持っていたものに気づいただけだ。いや、もらってきたはずだ。俺はお前のある目を見たことがない。

紡 当然。俺も気づいたのはその日だ。
では、気づき方が悪かったんだ。狂氣によって気づかされたせいでお前の中の何かが狂氣に変質したんだ。何を見た、何を知った？ お前をそうしたものは何だ？

響一郎 紡。それを知って何になる？ お前が知るべきなのは、俺が何に気づいて、何をしようと思ったのか、だろう？

紡 ……そうだ。違う。

響一郎 あの日帰ってから俺は一日、ただぼおとしていた。

紡 次の日もぼおとしていた。ときたまある発想が浮かぶと、奇声を上げて暴れだしそうになった。

響一郎 次の日、俺は図書館にこもった。

紡 その次の日もこもった。

響一郎 そして昨日、俺はアイデアと共に織乃さんに会い、これについて意を決した。今日はお前に頼み事をしようと思っている。

紡 聞くとは限らん。

響一郎 まあ話だけでも聞いてくれ。頼みとはこれだ。俺に、メメント・モリーの曲を作ってくれ。

紡 曲を？

響一郎 ああ。人の不安に共鳴し、押し殺した狂氣を爆発させ、ダンス・マカブルさえも引き起こすほど、素直なお前の曲が欲しい。

紡 なぜ、そんなことを言う。

響一郎 理由か。もちろん話そう。

紡 時に、こんな事実がある。人の死とは段階的なものなんだ。

紡 何を突然……。

響一郎 まず心拍や呼吸が止まるわけだが、そうすると脳は過熱状態になり、脳全体の活動が活発になる。これは強い興奮を引き起こし、白い光が見えるらしい。人は、明るい光の中で死んでいくんだ。そして快樂物質の束によって、生きていくうちには決して体験できないほどの安らぎと共に、最後の最後の細胞が、死にゆくのを待つ。

紡 何の話をしている。

響一郎 心肺停止の前の段階もあるだろう？ 食欲がなくなり、水がいらなくなり、あらゆる感覚がなくなる。極度の疲労、肉体の制御不能。この段階はどうも苦しそうだ。そこで、知っているかい？ ピレスロイドって、殺虫剤の成分。これ

はな、虫の神経に作用するんだが、その間、虫を興奮状態にするんだ。これな

ら、心肺停止前も苦しくない。ピレスロイドによって迎える死。人生で最も幸福な行為の完成だ。だが残念なことに、ピレスロイドは人には効果がない。

ここまでの話を合算した時、あるアイデアが浮かぶだろう。

ダンス・マカブルは、人のためのピレスロイドなんじゃないかって。

断る。俺の曲は、人を殺すためのものじゃない。

聞いてくれよ！！ お前を納得させるためにここまで調べたんだ。

俺の夢を覚えているか？

俺の夢はな、お前と二人組で、音楽家になることだ。

お前が書いた曲を俺が弾く。

だがこの夢は叶わない。家を捨てることまで考えたよ。でも話しても無理だった。ああ無理だったよ、勘当さえしてもらえなかった。俺から牧野は離れていかない。本当に恐ろしい両親だよ。だが仮に逃げた所で、世に出ることもできないかもしれない。そうなれば音楽家にはなれない。いやそもそも、俺の夢にお前が含まれる時点で俺の夢は叶わないんだ、お前を俺の家の事情に巻き込むわけにはいかないからな！

でもやっぱり、割り切れないんだよ。そのことに、気づいてしまったんだ。

頼む。俺は、お前の曲を弾く音楽家として、人生で一番の幸福を味わい死にたい。

何を言っているのかわかっているのか。

正気は失っていないと言った。お前も、それに同意したはずだ。

ああ、確かにそうだ。しかし、正気だからというのは何の言い訳にもならない！ お前は正気で、俺に、お前を殺せと頼むのか！

違う！ 俺はお前に、俺のために曲を書いてくれと頼んでいるだけだ。お前の曲は、人を殺すためのものじゃない、そうだろう！

……俺の曲は、そんなに罪作りか。

いいや。お前の曲は、人の心を動かすすぎるだけだ。俺は、お前の曲が大好きだよ。

お前がしようとしていることは、勝ち逃げと言うんじゃないか。

俺がこれから生きたとして、その生き様は勝ち逃げより無様だ。俺は、そんな国の末路を見てきた。

俺にも、同じものを見せてくれ。

それで、納得してくれるなら。

断らないのか。

理由がない。

そうだ、今、作曲は、

紡。ここいらで手を打ってくれないか。でないと俺は、絶対に言いたくないことまで、言わないといけなくなる。お前の同情は引きたくない。

いいか、もう俺は、決めてあるんだぞ。ただでさえ、喋るのは俺の方が上手いんだ。お前には、俺を説得なんてできないよ。

……それは、非道だ。そうだろう。俺には選択肢がない。

紡
響一郎

紡
響一郎

紡

響一郎

紡

響一郎

紡

響一郎

紡

響一郎

紡

響一郎

紡

紡

響一郎

ごめんな。

紡

具体的にはどうする？

響一郎

盛大にやらかすのにうってつけの場所で、ピアノを弾いてやろうと思う。死の間際まで幸せに浸れる曲を。

紡

……メメント・モリー。

紡、吐き気を催してうずくまる。その背をさする響一郎。

響一郎

俺宛ての、死を想う曲を。

○ 十七

大学の門前。すぐ芽と織乃、大学の中を覗いている。織乃が事前に響一郎に連絡を入れて彼を呼び出し、今から会うため、大学から出てくるのを待っている所。

織乃

……ねえ、すぐ芽さん、

すぐ芽

もう、何回目！？

織乃

大丈夫かしら？

すぐ芽

大丈夫よ！ あんなに練習したじゃない。歌子さんびつくりしてたでしょう？ ほら、そろそろ出てくるんじゃない？

織乃

やだもういつそ出てこないで！

響一郎

え、ごめん！？

織乃

ひゃあ！

すぐ芽

あ。

響一郎

今日はどうしたの？ といっても、悪いね、実は俺、夜には予定があるんだ。だから、あまり長くはいられないんだけど……。

織乃

ごめんなさい、お忙しいのに！ でも、今日を逃すとしばらく会えないと言っていたから。

響一郎

いいや、俺も会わないとなあと思っていたから、大丈夫。お友達も、ごめんね。

すぐ芽

あ、いえ、わたしは織乃さんを送ってきただけで、もう帰ります。

織乃

ええ。

すぐ芽

ええくじやないわよ、お邪魔しろっていうの？

響一郎

ところで、しばらく会えないって、何かあるんですか？

すぐ芽

ちよっと、遠出することになってね。

織乃

えっ、突然ですね。織乃さんは聞いてたの？

すぐ芽

ほんの少し前に。最近ずっと忙しくしていた理由をね。

響一郎

はあ、それで心の準備もそこそこ本番日を迎えたというわけね。もうちよっと早くに決まらなかったんですか？ そんな大事な……

響一郎

いや、そりゃ悪かったって……

すゞ芽 織乃さん置いていっちゃうなんて。
え、

響一郎 それはそうよすゞ芽さん。

すゞ芽 大学の何かですか？

響一郎 ……あ、紡は置いてくよ。

すゞ芽 それは別に聞いてませんけど。

織乃 じゃあね、織乃さん。頑張って。

すゞ芽 あっ、すゞ芽さん！

織乃 ありがとう。

すゞ芽 学校で、成果を聞かせてちょうだいね。

織乃 ええ！

すゞ芽、はける。

響一郎 頑張って、って？

織乃 その、実は最近、すゞ芽さんにダンスを見てもらっていて、今日はそれを披露

しに来たの。

響一郎 ダンスを？

織乃 そうよね、大変な時にこんなこと、迷惑よね。

響一郎 そんなことない！ じゃあ、どこか……あ、でも、どうして急に？

織乃 その、以前会った時、響一郎さん、元気なかったから。

響一郎 ……俺のため？

織乃 は、恥ずかしい言い回しをしないで。

響一郎 そう、……君は、俺に踊ってくれるのか。……。

織乃 もちろん、他にもできることがあればするわ。

響一郎 ありがとう。ごめんね。……ごめん。

織乃 ごめん、情けない俺は嫌いだろう。君が慕ってくれた俺の、像を、今壊してお
けばいい。本当は壊されなくなかったんだが、だめだ既に考えて——こんなこ
とを考えて、まだ慕ってほしいなんて馬鹿な話だ。

織乃 どうしたの響一郎さん！ 大丈夫？ だめよ、こんな道端で。

響一郎 だめなんだ俺は、もうねえ、織乃さん。ごめん、本当に、君に見せるような姿
じゃない。

織乃 大丈夫よ。平気だから。そうだ、どこか別の、落ち着ける所に行きましょう。

響一郎 ダンスホールへ。

織乃 え？

響一郎 地下のダンスホールへ行こう。あそこに行けば、俺の話がわかるから、どうか
俺を許してほしい。

織乃、響一郎、ダンスホールへ移動。その移動中の、所々でのやり取りを切
りとる。

響一郎 あの日その場所で、俺はダンス・マカブルとは何かを知ったんだ。

織乃 ダンス・マカブル？

響一郎 何か、考えたことはある？

織乃 いいえ。恥ずかしいけれど、ニュースで見聞きした程度よ。歌子さんの所で目にするまで、現実感もなかった。

響一郎 そういうものだよ。俺らにとって、死とは突拍子もないものだろう。

少し歩いて。

響一郎 （自分の頭を人差し指でとんとんとつきながら）

ここに、楽譜が入っている。

紡が書いた、俺の曲だ。紙の方は既に燃やした。

また少し歩いて。

織乃 じゃあ、わたしはどうなるの！？

響一郎 俺が居なくなれば、君との縁談も消える。君は晴れて自由だ。

織乃 そういうことじゃない。わたしの気持ちは？

響一郎 俺はもうだめなんだから。

織乃 馬鹿にしないで。そんなことで嫌いになったりしない。

響一郎 そんなことじゃない。俺は一瞬でも、君を巻き込もうと考えた！

織乃 当然じゃない！ 弱っている時は、甘えたいに決まってる！

むしろ嬉しかったわ。わたしなんかのダンスでも、あなたの演奏に乗せてもらえる！ しかも、あのあなたが、わたしに頼ってくれたのよ。

響一郎 馬鹿になったのかい？ その結果死ぬんだぞ。

織乃 そうかもしれないけれど、わたしは本当に嬉しかったの！

また少し歩いて。

響一郎 ……。

織乃 ……。

また少し歩いて、買い食い。大判焼きとか。

響一郎 おいしい？

織乃 おいしい。

歩いて、響一郎が発作的に弱り、吐き気を催す。ごめんごめんと小声で呟く。

織乃 大丈夫。大丈夫。

その場で、響一郎が落ち着くまで、一回休み。

織乃

わたし、あなたの望みっていうのが見つかってよかったと思っているの。望みがわからないって、辛いことでしょう？ あなたが死んでもいいわけじゃないけれど、望みの無かったあなたが、やつと見つけた望みなら、止めることもできないわ。言ったでしょう？ わたしばかり、望みを叶えてもらっていないの。

あなたは、死とは突拍子もないことだと言っていたけれど、死を望むことを否定する人は、正に、死を突拍子もないものだと思っている人だと思うわ。でも、死への道って、常にそこにあるものなのね。実感するわ。

それに、悪いことじゃないのよ。響一郎さんのいない時間を生きないし、響一郎さんに頼られたし、響一郎さんが好き。そんなわたしが完成するわ。

響一郎 ……今の俺には、断る余力がないんだよ？

織乃 最高じゃない。野暮もない。

響一郎 ……そろそろ行こうか。

織乃 大丈夫？ あとどれくらいかしら。

響一郎 その角。

また歩いて。ダンスホール。

まだ夕方、客はまばら。係員（監視員とボーイなど）が数人。しかし、照明は派手に輝き、主張の激しい音楽が響く。

織乃 こんな所が……。人はまばらね。

響一郎 まだ夕方だからね。本当は夜に、このピアノを借りるつもりだったんだけど。

織乃 わたし一人を巻き込むのにあれだけ猛省しておいて、ホールの人達全員を道ずれにするつもりだったの？

響一郎 集団ヒステリーと言ったって、巻き込まれるのは多少なり死を望んでいる人だけだよ。君は違うだろう。

織乃 わたし、上手に死ねるかしら。

響一郎 それを言うなら、俺も不安だ。ピアノを弾きながら死んだ人は、前例にない。

織乃 ついでに、この曲を弾くのも今日が初めて、一発勝負だ。

織乃 わたしも、初めて聞く曲で踊らなきゃ。

響一郎 練習したんだろう？

織乃 そういえば、すぐ芽さんに何も言っていないわ。

響一郎 やめる？

織乃 いいえ。おいていかないで。

響一郎 じゃあ、ここで気持ちを喋っておけばいいよ。きっと届けてもらえるよ。

織乃 誰が？

響一郎　　そういう人がいるのさ。

響一郎、ダンスホールの隅を一瞥する。

織乃　　……上手くいったわって。あと、心配しないでほしいわ。
響一郎　　俺も喋っておこう。

ネタが欲しいのならば、何が起こつても止めないでほしい。あと、しっかり伝えてくれ。こんな場所は潰れてしまえばいい。

織乃さん、本当にいいの？

織乃　　響一郎さんが言ったのよ。人生で一番の幸福の時間でしよう？
響一郎　　うーん……。

織乃　　あ、騙した気になっているでしょう。今更、年上の顔ができてると思っているの？　わたしをここに連れてきている時点で一人で死ぬ気はなかったのよ。それは違う。

織乃　　嘘ね。

響一郎　　確かに共に死ぬなら、他人よりも、俺を慕う女の子の方が断然いいと思う。

織乃　　最低だわ。

響一郎　　その通り。嫌い？

織乃　　好き。

響一郎　　すゝ芽さんも好き。

響一郎　　俺も、紡も好き。

織乃　　このピアノいいですね。古井戸さんの紹介で、弾いていいと言われています。待って、足首だけ。

響一郎、ピアノの前に座る。織乃、舞台中央へ。

響一郎　　ねえ、織乃さん。

響一郎、織乃、目線を合わせて、息を合わせる。

響・織　　《ルンタタルンバイ　音の神　舞姫神　の祝福を》

響一郎の演奏、織乃のダンス。

このシーンでは曲は使わない。人の声や自動車の音、ニュース番組の司会者の声、町を歩くときに聞こえてくるような環境音が、響一郎のピアノを弾く動きにあわせて流される。国の現状が、響一郎と織乃の二人に集約されるイメージ。

織乃のダンスは、ダンスの基礎練習で行われるような動きを元にし、曲にあわせてアレンジされたもの。

周囲にいた他のダンスホールの客たちが複数人同時に踊りだす。

悲鳴を上げて狂う人も出てくる。

係員たちは突然の事態に慌てている。(元々客の少ない夕方だったために油断していた。)

係員、狂った人たちを止めて外に連れ出していく。

係員からも狂う人が出てくる。

隠れていた記者、狂った係員を見て逃げ出す。(巻き込まないように)

やがて、踊っている人の中から、倒れる人が現れ始める。徐々に人はいなくなっていく、舞台上には響一郎と織乃。

二人きりのダンス・マカブル。狂っているとは思えないほどに綺麗。

曲の最後、ピアノの前で死んだ響一郎と、ホールで死んだ織乃の体だけが残る。

狂った悲鳴や、足音が物悲しく響く。

○ 十八

歌子と、複数人の国民たちが新聞を持って出てきて、舞台上を埋めるように立つ。

《内は新聞記事の文章。歌子が読み上げる。

歌子

《音楽学生、謹慎処分。

芸術大学に所属する男子大学生(22)が舞曲作曲禁止令に反し舞曲を作曲していたことがわかった。この学生に警察は警告を発し大学は実家での一年間の謹慎を命じた。学生は今年卒業を控えていたが取り消しとなった。》

歌子、響一郎と織乃が死んだことについての記事を探すが、見つからない。

他の国民たちは、この記事について興味を示す者、失くす者両方いるが、やがてどちらも普段通りの生活に戻る。

新聞がバサバサと鳴る。

噂を話す声も聞こえるようになる。

弦作の研究室。弦作の話を聞きに、歌子がやってきた所。弦作と歌子の二人きり。

弦作

報道はされませんよ。場所が場所だった上に、当時者があの、牧野と高遠ですからね。お上からの圧がすごいんですよ。

僕は彼の指導者として、大体のことは聞かされました。口止めもされていますから、君に話していることは内緒ですよ。

紡君と響一郎君は、ここのところ、それぞれ記者に張られていました。しかし、

響一郎君を張っていた方の記者は現場を見てしまったので、記事にするはずだったネタを全て取り上げられてしまい、新聞に載ったのは、紡君のこのみでした。今日、君にすゞ芽さんを連れてきてもらったのは、その記者から取り上げたメモ帳に、彼女への言伝が記されていたからです。彼女と、紡君にだけ、見ることが許されています。秘密でいただいたものですから。秘密ですよ。本当に秘密。

歌子 弦作先生。教え子が亡くなったんですよ。あなたは、平気なんですか？

弦作 それほど派手な方法を選んだ人こそ珍しいですが、夢破れて死を選ぶというのは、よくある話です。誰もが、君のように別の道を見つけて歩めるほど、強いわけではないですよ。

歌子 あたしが音楽の道に進むのを止めた張本人が、よく言いますよ。

弦作 男は音楽、女はダンス。神様の時代から決まっています。

わかつてますよ。でも、あたしが諦められたのは、そんな理由じゃないんです。弦作先生が、あたしに音楽をくれるって言うから、あたしは頑張って生きて来れたんだ。人の言葉はね、人ひとりの道くらい、ころっと変えますよ。それが、憧れた人ならなおさらね。故人に悪いですけどね、あたしは、弦作先生の教え子に怒っています。あたしは、別に織乃ちゃんの親でも何でもないけどね、知り合ったのも最近だがね、会ったこともない奴に奪われて、いい気はしていませんよ。

弦作 僕が教えているのは音楽だけです。僕は、教育者ではありませんから。

歌子 そうだね。弦作先生に当たるのは、筋違いかもね。

弦作 当たると言えば、ダンスホールを提案した古井戸っていう、あれは僕も多少知っている博士ですが、責任取らされるそうですね。ダンスホールはもちろん封鎖されますし、これからどうするんでしょうか。

歌子 大して知らない博士のことはどうでもいいんです。それより、すゞ芽ちゃんと今一緒に居る方は大丈夫なんでしょうね。あっちも教え子でしょう。

弦作 やっぱ僕のせいにしたがる。失礼ですね。大丈夫ですよ。どっちも、いい子なんですから。

○ 十九

紡と響一郎の宿舎の部屋。中には、紡とすゞ芽。

すゞ芽、メモの切れ端を手に持っている。

すゞ芽 これだけ？

紡 (頷く)

すゞ芽 上手くいったって、何が？ ダンス？ それとも死ぬこと？ 織乃さん、死ぬなんて一言も言っていなかったわ。なんでも話せる友達になろうって言ったのに。

紡 響一郎は、織乃さんと死ぬとは言っていなかった。織乃さんが死ぬことになっ

たのは、当日だったんだろう。

すゞ芽 響一郎さんが死ぬって知っていたの？

紡 曲を書けと頼まれた。

すゞ芽 よくかけたわね、よくも、よくも書けたわね！ わたしだったら、知っていたら、ダンスは教えなかった。それをあなたは……、

何も、思わないはずなのに。

紡 ……。

すゞ芽 わたしも、理解してあげなきゃいけないの？

紡 わからない。

すゞ芽 ……どうして死んだの？

紡 響一郎は、行く末の不安より死の幸福を選んだ。ここ数日は、幸せに死ぬために生きていたようだった。

すゞ芽 織乃さんは？

紡 わからない。しかし、書いているだろう。

すゞ芽 心配しないでほしって。

きつと、自分で決めたことだから、ってことよ。

織乃さん、響一郎さんを元気づけようとしていたの。死ぬ時って、わからないけど、とても苦しいと思うわ。でも、二人が一緒にいることで、その苦しさがなくなったのなら、織乃さんは、確かに、上手くいったんだと思う。

紡 俺の曲だけでは、力不足だったのだろうか。

人のために曲を作ったのは、響一郎が初めてだった。少しでも、響一郎が楽に死ぬるように、などと、人のことを考えて曲を作る日が来るとは思っていないかった。

すゞ芽 織乃さんとあなたは、別だと思うわよ。あなたの曲も、響一郎さんを楽にしたと思う。あなたすごいんだから。

紡 そうだとい。しかし、相棒の命も、俺にとってはインスピレーションの一つでしかない。らしいから。曲のイメージなら、事あるごとに浮かんでくる。書かなければ、曲は俺の中に溜まるだけ溜まり、溢れてしまう。響一郎に作曲を頼まれた時もそうだった。

……そうなの？

紡 (頷く)

すゞ芽 ああ、それは懺悔のつもりなのね。それなら、違うと思うわ。あなた言葉下手だから、代わりに曲で喋るんでしょ。なら、気持ち曲になっちゃってしまうのは、普通のことだと思う。

紡 俺はちゃんと、あいつの死を悲しめているのか？

すゞ芽 そりゃ……そうだ、その曲を聞けばわかるかもしれないわ。

紡 響一郎に作った曲だ。俺には弾けない。どんな曲に仕上がったのか、俺も、一度も聞けなかった。

すゞ芽 そうなのね……。

ねえ、さつき死の幸福って言ったじゃない？ 死ぬことって、幸福だと思う？

それに、あなたにこれを言うのは気が引けるけれど、楽に死ぬって、あると思う？

紡 響一郎は、死の瞬間に、生きていては味わえないほどの幸福が訪れると言っていた。

すゞ芽 生きていては味わえない？ 絶対？ これからのどんなことよりも幸福なの？ それに死の瞬間って、それ幸福を感じるかしら？

紡 知らない。

すゞ芽 そうね。

紡 死が何者かはわからないから、それが幸か不幸か、俺は知らない。響一郎には、幸福に思えたというだけの話だ。

すゞ芽 織乃さんにも？

紡 ただ、メメント・モリー、死を想えとは、死を悲観することではない。

すゞ芽 じゃあ、何？

紡 死ぬ前に、生を楽しめ。今を楽しめ。

背後に死を意識しながら、響一郎は夢を叶え、織乃さんは愛しい人と踊ったんだろう。死を意識することで、幸福な体験を真に楽しむことができる。あ。

紡、部屋の隅のレコードプレーヤーに移動。曲をかける準備をする。

すゞ芽 急ね？

紡 聞けば気持ちができるかもしれない。

すゞ芽 あなたなの？

紡 いや、響一郎と、織乃さんの。

サン＝サーンス 交響詩「死の舞踏」が、レコードプレーヤーから流れる。
(最初の喫茶店の場面で流したのがこの曲でない場合、その流した曲を流す。)

すゞ芽 あの曲だわ。覚えてるわよ。メメント・モリーよね。

紡 俺は、響一郎の演奏が好きだった。響一郎と演奏するのも好きだったが、俺が加わると、あいつの演奏を乱してしまう気がして、二人で弾いた曲を、こうやって聞くのは苦手だ。

しばらく、曲を聞く。

すゞ芽、くるくると回りだす。

紡 響一郎の、最後の演奏を聞きたかった。

すゞ芽 わたしも、もつと織乃さんと話したかった。死ぬよりも、織乃さんと話す方が、

ずっとずっと楽しい！

紡
すゝ芽

ねえ、この曲、やっぱり泣いてるわ。必死で、必死過ぎて泣いてるわよ。今を
楽しむことって、そんなに必死にならないといけないの？ 死を意識する必
要ってある？ あなたの曲でしょう、何を考えているの？
知らない。なんだ、メメント・モリーとは。
知らない！ あなたが知らないならもう何にも知らない！

すゝ芽、曲に乗って踊りだす。紡も巻きこんで。
だんだんと、楽しそうに。

【終】